

# 素戔鳴尊

芥川龍之介

青空文庫



高たか天原あまがはらの国も春になつた。

今は四方よもの山々を見渡しても、雪の残っている峰は一つもなかつた。牛馬の遊んでいる草原くさばらは一面ほのに仄かな緑をなすつて、その裾すそを流れて行く天あめの安河やすかわの水の光も、いつか何となく人ひと懐なつかしい暖みを湛たえているようであつた。ましてその河かわ下しもにある部落には、もう燕つばくらも帰つて来れば、女たちが瓶かめを頭に載せて、水を汲みに行く噴ふき井いの椿つばきも、とうに点々と白い花を濡れ石の上に落していた。――

そう云う長閑のどかな春の日の午後、天あめの安河やすかわの河原には大勢の若者が集まつて、余念もなく力ちから競くらべに耽ふけつていた。

始はじめ、彼等あつちは手てん手でに弓矢を執とつて、頭上の大空へ矢を飛ばせた。彼等の弓の林の中から、は、勇ましい弦ゆんづるの鳴る音が風のように起つたり止んだりした。そうしてその音の起る度に、矢は無数の蝗いなごのごとく、日の光に羽根を光らせながら、折から空に懸かかつている霞の中へ飛んで行つた。が、その中でも白い隼はやぶさの羽根の矢ばかりは、必ずほかの矢よりも高く――ほ

とんど影も見えなくなるほど高く揚つた。それは黒と白と市松模様いちまつもようの倭衣しずりを着た、容貌ようほの醜うい一人の若者が、太い白檀木しらまゆみの弓を握つて、時々切つて放す利とがり矢であつた。

その白羽しらはの矢が舞い上る度に、ほかの若者たちは空を仰いで、口々に彼の技ぎり倆りょうを褒ほめそやした。が、その矢がいつも彼等のより高く揚る事を知ると、彼等は次第に彼の征そや矢やに冷淡な態度を装よそおい出した。のみならず彼等の中の何者うちかが、彼には到底及ばなくとも、かなり高い所まで矢を飛ばすと、反かえつてその方へ賛辞を与えたりした。

容貌の醜い若者は、それでも快活に矢を飛ばせ続けた。するとほかの若者たちは、誰からともなく弓を引かなくなつた。だから今まで紛ふん々ぶんと乱れ飛んでいた矢の雨も、見る見る数が少なくなつて来た。そうしてとうとうしまいには、彼の射る白羽の矢ばかりが、まるで昼見える流りゅう星せいのように、たつた一筋空へ上るようになった。

その内に彼も弓を止めて、得意らしい色を浮べながら、仲間の若者たちの方を振返つた。が、彼の近所にはその満足を共にすべく、一人の若者も見当らなかつた。彼等はもうその時には、みんな河原の水際みぎわにより集まつて、美しい天の安河の流れを飛び越えるのに熱中していた。

彼等は互きそに競い合つて、同じ河の流れにしても、幅の広い所を飛び越えようとした。時

によると不運な若者は、焼太刀やきだちのように日を照り返した河の中へ転げ落ちて、眩まばい水みずけ煙むりを揚げる事もあった。が、大抵たいていは向うの汀なぎさへ、ちようど谷を渡る鹿のように、ひらりひらりと飛び移つて行つた。そうして今まで立つていたこちらの汀を振返つては声々に笑つたり話したりしていた。

容貌の醜い若者はこの新しい遊戯を見ると、すぐに弓矢を砂の上に捨てて、身軽く河の流れを躍り越えた。そこは彼等が飛んだ中でも、最も幅の広い所であつた。けれどもほかの若者たちはさらに彼には頓着しなかつた。彼等には彼の後で飛んだ——彼よりも幅の狭い所を彼よりも楽に飛び越えた、背せいの高い美貌びぼうの若者の方が、遥はるかに人気があるらしかつた。その若者は彼と同じ市松の倭衣しすりを着ていたが、頸くびに懸けた勾まがたま玉や腕に嵌はめた釧くしろなどは、誰よりも精巧な物であつた。彼は腕を組んだまま、ちよいと羨しそうな眼を挙げて、その若者を眺めたが、やがて彼等の群を離れて、たった一人陽炎かげろうの中を河下かわしもの方へ歩き出した。

河下の方へ歩き出した彼は、やがて誰一人飛んだ事のない、三丈ほど幅のある流れの汀へ足を止めた。そこは一旦滞った水が今までの勢いを失いながら、兩岸の石と砂との間に青々と激んでいる所であった。彼はしばらくその水面を目測しているらしかったが、急に二三步汀を去ると、まるで石投げを離れた石のように、勢いよくそこを飛び越えようとした。が、今度はとうとう飛び損じて、凄じい水煙を立てながら、まっさかさまに深みへ落ちこんでしまった。

彼の河へ落ちた所は、ほかの若者たちがいる所と大して離れていなかった。だから彼の失敗はすぐに彼等の目にもはいった。彼等のある者はこれを見ると、「ざまを見ろ」と云うように腹を抱えて笑い出した。と同時にまたある者は、やはり嘸し立てながらも、以前よりは遙に同情のある声援の言葉を与えたりした。そう云う好意のある連中には、あの精巧な勾玉や釧の美しさを誇っている若者なども交つていた。彼等は彼の失敗のために、世間一般の弱者のごとく、始めて彼に幾分の親しみを持つ事が出来たのであった。が、彼等も一瞬の後には、また以前の沈黙に——敵意を蔵した沈黙に還らなければならぬ事が出来た。

と云うのは河に落ちた彼が、濡れ鼠のようになったまま、向うの汀へ這い上ったと思う

と、執念しゅうねんぶか深くもう一度その幅の広い流れの上を飛び越えようとしたからであつた。いや、飛び越えようとしたばかりではない。彼は足を縮ちぢめながら、明礬みょうばんいろ色の水の上へ踊り上つたと思う内に、難なくそこを飛び越えた。そうしてこちらの水際みぎわへ、雲のような砂煙を舞い上げながら、どさりと大きな尻餅しりもちをついた。それは彼等の笑を買かうべく、余りに壮厳すぎる滑稽であつた。勿論彼等の間からは、喝采も歡呼も起らなかつた。

彼は手足の砂を払うと、やつとずぶ濡れになつた体を起して、仲間の若者たちの方を眺めやつた。が、彼等はもうその時には、流れを飛び越えるのにも飽きたと見えて、また何か新しい力ちからくら競べを試むべく、面白そうに笑い興きじながら、河上かわかみの方へ急ぐ所であつた。それでもまだ容貌の醜い若者は、快活な心もちを失うなかつた。と云うよりも失う筈がなかつた。何故なぜと云えば彼等の不快は未いまだに彼には通じなかつた。彼はこう云う点になると、実際どこまでも御目出度おもめでたく出来上つた人間の一人であつた。しかしまたその御目出度さがあらゆる強者に特有な烙印やきいん印である事も事実であつた。だから仲間の若者たちが河上の方へ行くのを見ると、彼はまだ滴しずくを垂らしたまま、麗うるらかな春の日に目まかげをして、その砂の上を歩き出した。

その間にほかの若者たちは、河原かわらに散在する巖石がんせきを持ち上げ合う遊戯ゆうぎを始めていた。岩

は牛ほどの大きさのも、羊ほどの小さきのも、いろいろ陽炎の中に転がっていた。彼等はみんな腕まくりをして、なるべく大きい岩を抱き起そうとした。が、手ごろな巖石のほかは、中でも膂力の逞しい五六人の若者たちでない、容易に砂から離れなかつた。そこでこの力競べは、自然と彼等五六人の独占する遊戯に変わってしまった。彼等はいずれも大きな岩を軽々と擡げたり投げたりした。殊に赤と白と三角模様の倭衣の袖をまくり上げた、顔中鬚に埋まつている、背の低い猪首の若者は、誰も持ち上げない巖石を自由に動かして見せた。周囲に佇んだ若者たちは、彼の非凡な力業に賞讃の声を惜まなかつた。彼もまたその賞讃の声に報ゆべく、次第に大きな巖石に力を試みようとするらしかつた。

あの容貌の醜い若者は、ちようどこの五六人の力競の真最中へ来合せたのであつた。

### 三

あの容貌の醜い若者は、両腕を胸に組んだまま、しばらくは力自慢の五六人が勝負を争うのを眺めていた。が、やがて技癢に堪え兼ねたのか、自分も水だらけな袖をまくると、



幅の広い肩を聳<sup>そび</sup>かせて、まるで洞<sup>ほら</sup>穴<sup>あな</sup>を出る熊のように、のそのそとその連中の中へはいって行つた。そうしてまだ誰も持ち上げない巖石の一つを抱くが早いか、何の苦もなくその岩を肩の上までさし上げて見せた。

しかし大勢の若者たちは、依然として彼には冷淡であつた。ただ、その中でもさつきから賞讃の声を浴びていた、背の低い猪首の若者だけは、容易ならぬ競争者が現れた事を知つたと見えて、さすがに妬<sup>ねた</sup>ましそうな流し眼をじろじろ彼の方へ注いでいた。その内に彼は担<sup>かつ</sup>いだ岩を肩の上で一<sup>ひと</sup>揺<sup>ゆ</sup>り揺<sup>ゆ</sup>つてから、人のいない向うの砂の上へ勢いよくどうと投げ落した。するとあの猪首の若者はちようど餌に饑<sup>う</sup>えた虎のように、猛然と身を躍らせながら、その巖石へ飛びかかつたと思うと、咄<sup>とつ</sup>嗟<sup>さ</sup>の間に抱え上げて、彼にも劣らず楽々と肩よりも高くかざして見せた。

それはこの二人の腕力が、ほかの力自慢の連中よりも数段上にあると云う事を雄弁に語つている証拠であつた。そこで今まで臆<sup>おく</sup>面<sup>めん</sup>も無く力競べをしていた若者たちはいづれも興<sup>き</sup>のさめた顔を見合せながら、周囲に佇<sup>た</sup>んで見物仲間へ嫌<sup>いや</sup>でも加わらずにはいられた。その代りまた後<sup>あと</sup>に残つた二人は、本来さほど敵意のある間柄でもなかつたが、騎<sup>き</sup>虎<sup>こ</sup>の勢いで已<sup>や</sup>むを得ず、どちらか一方が降参するまで雌雄<sup>しゆう</sup>を争わずにはいられなくなつた。

この形勢を見た多勢の若者たちは、あの猪首いくびの若者がさし上げた岩を投げると同時に、これまでよりは一層熱心にどつとどよみを作りながら、今度はずぶ濡れになった彼の方へいっなくなまなこに眼を注いだ。が、彼等がただ勝負にのみ興味を持つていると云う事は、——彼自身に対してはやはり好意を持つていないと云う事は、彼等の意地いじわ悪わるいような眼の中にも、明かによめる事実であつた。

それでも彼は相あいかわらず不ふ変へん悠ゆう々々と手に唾つばきなど吐はきながら、さっきのよりさらに一ひと嵩かさ大きい巖石の側へ歩み寄つた。それから両手に岩を抑おさえて、しばらく呼吸を計つていたが、たちまちうんと力を入れると、一気に腹まで抱え上げた。最後にその手をさし換えてから、見る見る内にまた肩まで物も見事に担かいで見せた。が、今度は投げ出さずに、眼で猪首の若者を招くと、人の好きそうな微笑を浮べながら、

「さあ、受取るのだ。」と声をかけた。

猪首の若者は数歩を隔てて、時々髭ひげを噛かみながら、嘲あざけるように彼を眺めていたが、

「よし。」と一言答こたえると、つかつかと彼の側へ進み寄つて、すぐにその巖石を小山のような肩へ抱だき取つた。そうして二三歩歩いてから、一度眼の上までさし上げて置いて、力の限り向うへ抛ほうり投げた。岩は凄じい地響こきをさせながら、見物の若者たちの近くへ落

ちて、銀粉のような砂煙を揚げた。

大勢の若者たちはまた以前のようによめき立った。が、その声はまだ消えない内に、もうあの猪首の若者は、さらに勝敗を争うべく、前にも増して大きい岩を水際みぎわの砂から抱き起していた。

#### 四

二人はこう云う力ちから競くらべを何回となく闘たたかわせた。その内に追い追ひ二人とも、疲労の気色けしきを現して来た。彼等の顔や手足には、玉のような汗が滴したたっていた。のみならず彼等の着ている倭衣しずりは、模様の赤黒も見えないほど、一面に砂にまみれていた。それでも彼等は息を切らせながら、必死に巖石いしを擡もたげ合つて、最後の勝敗が決するまでは容易やに止めやめやな容子ようすもなかつた。

彼等を取り巻いた若者たちの興味は、二人の疲労が加わるのにつれて、益々強くなるらしかつた。この点ではこの若者たちも闘とうけい鶏けいや闘とうけん犬けんの見物けんぶつ同様、残忍でもあれば冷酷でもあつた。彼等はもう猪首の若者に特別な好意を持たなかつた。それにはすでに勝負の

興味が、余りに強く彼等の心を興奮の網に捉えていた。だから彼等は二人の力者に、代る代る声援を与えた。古来そのために無数の鶏、無数の犬、無数の人間が徒らに尊い血を流した、——宿命的にあらゆる物を狂気にさせる声援を与えた。

勿論この声援は二人の若者にも作用した。彼等は互に血走った眼の中に、恐るべき憎悪を感じ合つた。殊に背の低い猪首の若者は、露骨にその憎悪を示して憚らなかつた。彼の投げ捨てる巖石は、しばしば偶然とは解釈し難いほど、あの容貌の醜い若者の足もとに近く転げ落ちた。が、彼はそう云う危険に全然無頓着でいるらしかつた。あるいは無頓着に見えるくらい、刻々近づいて来る勝敗に心を奪われているのかも知れなかつた。

彼は今も相手の投げた巖石を危く躲しながら、とうとうしまいには勇を鼓して、これも水際に横わつている牛ほどの岩を引起しにかかつた。岩は斜に流れを裂いて、涼々とたぎる春の水に千年の苔を洗わせていた。この大岩を擡げる事は、高天原第一の強力と云われた手力雄命でさえ、たやすく出来ようとは思われなかつた。が、彼はそれを両手に抱くと、片膝砂へついたまま、渾身の力を揮い起して、ともかくも岩の根を埋めた砂の中からは抱え上げた。

この人間以上の膂力は、周囲に佇んだ若者たちから、ほとんど声援を与うべき余裕

さえ奪つた観があつた。彼等は皆息を呑んで千曳の大岩を抱えながら、砂に片膝ついた彼の姿を眼も離さずに眺めていた。彼はしばらくの間動かなかつた。しかし彼が懸命の力を尽している事だけは、その手足から滴り落ちる汗の絶えないのにも明かであつた。それがやや久しく続いた後、声をひそめていた若者たちは、誰からともなくまたどよみを挙げた。ただそのどよみは前のような、勢いの好い声援の叫びではなく、思わず彼等の口を洩れた驚歎の呻きにほかならなかつた。何故と云えばこの時彼は、大岩の下に肩を入れて、今までついていた片膝を少しづつ擡げ出したからであつた。岩は彼が身を起すと共に、一寸ずつ、一分ずつ、じりじり砂を離れて行つた。そうして再び彼等の間から一種のどよみが起つた時には、彼はすでに突兀たる巖石を肩に支えながら、みずらの髪を額に乱して、あたかも大地を裂いて出た土雷の神のごとく、河原に横わる乱石の中に雄々しくも立ち上つていた。

## 五

千曳の大岩を担いだ彼は、一二足三足蹠踉と流れの汀から歩みを運ぶと、必死と食

しばった齒の間から、ほとんど呻吟する様な声で、「好いか渡すぞ。」と相手を呼んだ。猪首いぐびの若者は、逡巡しゆんじゆんした。少くとも一瞬間は、凄壯そのもののような彼の姿に一種の威圧を感じたらしかった。が、これもすぐにまた絶望的な勇気を振り起して、「よし。」と噛みつくように答えたと思うと、奮然と大手を拵げながら、やにわにあの大岩を抱き取ろうとした。

岩はほどなく彼の肩から、猪首の若者の肩へ移り出した。それはあたかも雲の堰が押し移るがごとく緩漫かんまんであった。と同時にまた雲の峰が堰せき止め難いごとく刻薄であった。猪首の若者はまっ赤になって、狼おおかみのように牙きはを噛みながら、次第にのしかかって来る千曳ちびきの岩を逞しい肩に支えようとした。しかし岩が相手の肩から全く彼の肩へ移った時、彼の体は刹那せつなの間、大風おおかぜの中の旗竿のごとく揺れ動いたように思われた。するとたちまち彼の顔も半面を埋めた鬚ひげを除いて、見る見る色を失い出した。そうしてその青ざめた額から、足もとの眩い砂の上へ頻に汗の玉が落ち始めた。——と思う間もなく今度は肩の岩が、ちようどさつきとは反対に一寸ずつ、一分いちぶずつ、じりじり彼を圧して行つた。彼はそれでも死力を尽して、両手に岩を支えながら、最後まで悪闘を続けようとしたが、岩は依然として運命のごとく下つて来た。彼の体は曲り出した。彼の頭も垂れるようになった。今の彼

はどこから見ても、石塊いしくれの下にもがいている蟹かにとさらに変りはなかった。

周囲に集まった若者たちは、余りの事に気を奪われて、茫然とこの悲劇を見守っていた。また実際彼等の手では、到底千曳の大岩の下から彼を救い出す事はむずかしかった。いや、あの容貌の醜い若者でさえ、今となっては相手の背せなからさつき擡もたげた大盤石だいばんじやくを取りのける事が出来るかどうか、疑わしいのは勿論であった。だから彼もしばらくの間は、恐怖と驚愕きょうがくとを代る代る醜い顔に表しながら、ただ、漫然と自失した眼を相手に注ぐよりほかはなかった。

その内に猪首の若者は、とうとう大岩せなに背おを圧されて、崩折くずおれるように砂へ膝をついた。その拍子ひょうしに彼の口からは、叫ぶとも呻うめくとも形容出来ない、苦しそうな声が一ひとこえあふ声溢れて来た。あの容貌の醜い若者は、その声が耳にはいるが早いか、急に悪夢から覚めたごとく、猛然と身を翻ひるがえして、相手の上に蔽おほいかぶさった大岩を向うへ押しつけようとした。が、彼がまだ手さえかけない内に、猪首の若者は多愛たわいもなく砂の上にのめりながら、岩にひしがる骨の音と共に、眼からも口からも夥おびただしく鮮あざやかな血ほとほしを迸ほとばしらせた。それがこの憐むべき強ごこ力うりきの若者の最期さいごであった。

あの容貌の醜い若者は、ぼんやり手を束つかねたまま、陽炎かげろうの中に倒れている相手の屍骸しがい

を見下した。それから苦しそうな視線を挙げて、無言の答を求めるように、おずおず周囲に立っている若者たちを見廻した。が、大勢の若者たちは麗らかな日の光を浴びて、いずれも黙念もくねんと眼を伏せながら、一人も彼の醜い顔を仰ぎ見ようとするものはなかった。

## 六

高天原たかまがはらの国の若者たちは、それ以来この容貌の醜い若者に冷淡よそおを装う事が出来なくなつた。彼等のある一団は彼の非凡な腕力に露骨な嫉妬しつとを示し出した。他の一団はまた犬のごとく盲目的に彼を崇拜した。さらにまた他の一団は彼の野性と御目出度おめでたさとに残酷な嘲ち笑ようしよを浴せかけた。最後に数人の若者たちは心から彼に信服した。が、敵味方の差別なく彼等がいずれも彼に對して、一種の威圧を感じ始めた事は、打ち消しようのない事実であつた。

こう云う彼等の感情の変化は、勿論彼自身も見逃さなかつた。が、彼のために悲惨な死を招いた、あの猪首いぐびの若者の記憶は、未だに彼の心の底に傷いたましい痕跡こんせきを残していた。この記憶いを抱いだいている彼は、彼等の好意と反感との前に、いずれも当惑に似た感じを味わ



ないではいられなかった。殊に彼を尊敬する一団の若者たちに接する時は、ほとんど童女にでも似つかわしい羞恥しゆうちの情さえ感じ勝ちであった。これが彼の味方には、今までよりまた一層、彼に好意の目まなざしを向けさせることになるらしかった。と同時に彼の敵には、それだけ彼に反感を加えさせる事にもなるらしかった。

彼はなるべく人を避けた。そうして多くはたった一人、その部落を繞めぐる山間の自然の中に時を過ごした。自然は彼に優しくかった。森は木の芽を煙らせながら、孤独に苦しんでいる彼の耳へも、人懐かしい山鳩やまばとの声を送って来る事を忘れなかった。沢も芽ぐんだ蘆あしと共に、彼の寂寥せきりようを慰むべく、仄ほのかに暖い春の雲を物静な水に映していた。藪木やぶきの交まじる針はり金雀花りえにしだ、熊笹の中から飛び立つ雉子ききす、それから深い谷川の水光りを乱す鮎あゆの群、——彼はほとんど至る所に、仲間の若者たちの間には感じられない、安息と平和とを見出した。そこには愛憎あいぞうの差別はなかった、すべて平等に日の光と微風との幸福に浴していた。しかし——しかし彼は人間であった。

時々彼が谷川の石の上に、水を掠かすめて去来する岩いわ燕つばめを眺めてみると、あるいは山やま峡いの辛夷こぶしの下に、蜜みつに酔よって飛びも出来ない虻あぶの羽音はねおとを聞いていると、何とも云いようのない寂しさが突然彼を襲う事があった。彼はその寂しさが、どこから来るのだから

なかつた。ただ、それが何年か前に、母を失った時の悲しみと似ているような気もちだけがした。彼はその当座とうざどこへ行つても、当然そこにいるべき母のいない事を見せられると、必ず落莫らくぼくたる空虚の感じに圧倒されるのが常であつた。その悲しみに比べると、今の彼の寂しさが、より強いものとは思われなかつた。が、一人の母を恋なげ歎なげくより、より大きいと云う心もちがあつた。だから彼は山間の春の中に、鳥や獣けもののごとくさまよいながら、幸福と共に不可解な不幸をも味わずにはいられなかつた。

彼はこの寂しさに悩まされると、しばしば山腹に枝を張つた、高い柏かしわこずえの梢こずえに上つて、遙か目の下の谷間の景色にぼんやりと眺め入る事があつた。谷間にはいつも彼の部落が、天あめの安河やすかわの河原かわらに近く、碁石ごいしのように点々と茅葺かやぶき屋根を並べていた。どうかするとまたその屋根の上には、火食かしよくの煙が幾すじもかすかに立ち昇つている様も見えた。彼は太い柏の枝へ馬乗りまたに跨またがりながら、長い間その部落の空を渡つて来る風に吹かれていた。風は柏の小枝を揺ゆすつて、折々枝頭の若芽においの匂においを日の光の中に煽り立てた。が、彼にはその風が、彼の耳元を流れる度に、こう云う言葉を細々と囁ささやいて行くように思われた。

「素戔鳴すさのよ。お前は何を探しているのだ。お前の探しているものは、この山の上にもなければ、あの部落の中にもないではないか。おれと一しよに来い。おれと一しよに来い。お

前は何をためらっているのだ。素戔嗚よ。……」

## 七

しかし素戔嗚は風と一しよに、さまよつて歩こうとは思わなかつた。では何が孤独な彼を高天原の国に繋いでいたか。——彼は自らそう尋ねると、必ず恥かしさに顔が赤くなつた。それはこの容貌の醜い若者にも、私かに彼が愛している部落の娘がいたからであつた。そうしてその娘に彼のような野人が恋をすると云う事は、彼自身にも何となく不似合の感じがしたからであつた。

彼が始めてこの娘に遇つたのは、やはりあの山腹の柏の梢に、たつた一人上つていた時であつた。彼はその日も茫然と、目の下に白くうねっている天の安河を眺めていると、意外にも柏の枝の下から晴れ晴れした女の笑い声が起つた。その声はまるで氷の上へばらばらと礫を投げたように、彼の寂しい真昼の夢を突嗟の間に打ち砕いてしまった。彼は眠を破られた人の腹立たしさを感じながら、柏の下に草を敷いた林間の空き地へ眼を落した。するとそこには三人の女が、麗らかな日の光を浴びて、木の上の彼には気がつかないのか、

頻しきりに何か笑い興じていた。

彼等は皆竹籠ひしを臂にかけている所を見ると、花か木の芽か山やまうど独活を摘みに来た娘らしかった。素戔鳴はその女たちを一人も見知つて居なかつた。が、彼等があ部の部落の中でも、卑いやしいものの娘でない事は、彼等の肩かかに懸つて居る、美しい領巾ひれを見ても明かであつた。彼等はその領巾を微風ひるがえに翻しながら、若草の上に飛び悩んでいる一羽の山やまぼと鳩を追いまわっていた。鳩は女たちの手の間を縫つて、時々一生懸命に痛めた羽根をばたつかせたが、どうしても地上三尺とは飛び上る事が出来ないようであつた。

素戔鳴は高い柏の上から、しばらくこの騒さわぎを見下していた。するとその内に女たちの一人は臂に懸けた竹籠もそこへ捨てて、危く鳩を捕えようとした。鳩はまた一しきり飛び立ちながら、柔かい羽根を雪のように紛々とあたりへ撒まき散らした。彼はそれを見るが早いか、今まで跨またつていた太枝を掴つかんで、だらりと宙に吊つり下つた。と思うと一つ弾はみをつけて、柏の根元の草の上へ、勢いよくどきりと飛び下りた。が、その拍子ひょうしに足をすべらせ、呆あけにとられた女たちの中へ、仰あおむ向けさまに転がつてしまった。

女たちは一瞬間、唾おしのように顔を見合せていたが、やがて誰から笑うともなく、愉快そうに皆笑い出した。すぐに草の上から飛び起きた彼は、さすがに問の悪そうな顔をしながら

ら、それでもわざと傲然ごうぜんと、女たちの顔を睨めまわした。鳩はその間に羽根を引き引き、木の芽に煙っている林の奥へ、ばたばた逃げて行つてしまった。

「あなたは一体どこにいらしたの？」

やつと笑い止んだ女たちの一人は蔑むさげすようにこう云いながら、じろじろ彼の姿を眺めた。が、その声には、まだ抑え切れない可笑おかしさが残っているようであった。

「あすこにいた。あの柏の枝の上に。」

素戔嗚は両腕を胸に組んで、やはり傲然と返事をした。

## 八

女たちは彼の答を聞くと、もう一度顔を見合せて笑い出した。それが素戔嗚すさのおのみこと尊には腹も立てば同時にまた何となく嬉しいような心もちもした。彼は醜い顔をしかめながら、故に彼等こしとらを脅すおびやかべく、一層不機嫌ふきげんらしい眼つきを見せた。

「何が可笑おかしい？」

が、彼等には彼の威嚇いかくも、一向効果がないらしかった。彼等はさんざん笑つてから、よ

うやく彼の方を向くと、今度はもう一人がやや恥しそうに、美しい領巾ひれを弄もてびながら、「じゃどうしてまた、あすこから下りていらしたの？」と云った。

「鳩はとを助けてやろうと思つたのだ。」

「私あたしたちだつて助けてやる心算つもりでしたわ。」

三番目の娘は笑いながら、活いきき活いききと横合よこあいから口を出した。彼女はまだ童女の年輩ねんぱいから、いくらも出てはいないらしかった。が、二人の友だちに比べると、顔も一番美しければ、容ようす子こもすぐれて澆はつらつ澆はつらつとしていた。さつき竹籠たけかごを投げ捨てながら、危あやく鳩はとを捕とらえようとしたのも、この利り発はつらしい娘に違ちがいなかつた。彼は彼女と眼まなこを合あわすと、何なに故ゆゑと云う事もなく狼ろうばい狽ばいした。が、それだけに、また一方では、彼女の前にその慌あわて方かたを見せたくないと云う心もちもあつた。

「嘘うそをつけ。」

彼は一生懸命いっせいけんめいに、乱暴らんぼうな返事こたへを抛ほうりつけた。が、その嘘うそでない事は、誰たれよりもよく彼自身かみづみが承知しやうちしていそうな気きもちがしていた。

「あら、嘘うそなんぞつくものですか。ほんとうに助けてやる心算つもりでしたわ。」

彼女がこう彼をたしなめると、面白おもしろそうに彼の当惑とうわくを見守みもっていた二人の女たちも、

一度に小鳥のごとくしゃべり出した。

「ほんとうですわ。」

「どうして嘘だと御思い？」

「あなたばかり鳩が可愛い（かわい）のじやございません。」

彼はしばらく返答も忘れて、まるで巢を壊された蜜蜂のごとく、三方から彼の耳を襲つて来る女たちの声に驚嘆していた。が、やがて勇気を振り起すと、胸に組んでいた腕を解いて、今にも彼等を片っ端から薙倒し（なぎたお）しそうな擬勢を示しながら、雷のように怒鳴りつけた。

「うるさい。嘘でなければ、早く向うへ行け。行かないと、——」

女たちはさすがに驚いたらしく、慌てて彼の側を飛びのいた。が、すぐにまた声を立てて笑いながら、ちようど足もとに咲いていた嫁菜の花を摘み取っては、一斉に彼へ抛りつけた。薄紫の嫁菜の花は所嫌わず紛々と、素戔嗚尊の体に降りかかった。彼はこの匂の好い雨を浴びたまま、呆氣にとられて立ちすくんでいた。が、たちまち今怒鳴りつけた事を思い出して、両腕を大きく開くや否や、猛然と悪戯な女たちの方へ、二足三足突進した。

彼等はしかしその瞬間に、素早く林の外へ逃げて行った。彼は茫然と立ち止つたなり、次第に遠くなる領巾の色を、見送るともなく見送つた。それからあたりの草の上に、点々と優しくこぼれている嫁菜の花へ眼をやつた。すると何故か薄笑いが、自然と唇に上つて来た。彼はごろりとそこへ横になつて、芽をふいた梢の向うにある、麗らかな春の空を眺めた。林の外ではかすかながら、まだ女たちの笑い声が聞えた。が、間もなくそれも消えて、後にはただ草木の榮を孕んだ、明るい沈黙があるばかりになつた。……

何分なんぶん後のち、あの羽根を傷けた山鳩は、怯おず怯おずまたそこへ還かえつて来た。その時もう草の上の彼は、静な寢息を洩らしていた。が、仰向あおむいた彼の顔には、梢から落ちる日の光と一しよに、未だに微笑の影があつた。鳩は嫁菜の花を踏みながら、そつと彼の近くへ来た。そうして彼の寢顔を覗くと、仔細らしく首を傾けた。あたかもその微笑の意味を考えようとでもするように。――

## 九

その日以来、彼の心の中には、あの快活な娘の姿が、時々鮮かに浮ぶようになった。彼



は前にも云つたごとく、彼自身にもこう云う事実を認める事が恥しかった。まして仲間の若者たちには、一言もこの事情を打ち明けなかつた。また實際仲間の若者たちも彼の秘密を嗅ぎつけるには、余りに平生の素戔嗚が、恋愛とは遙に縁の遠い、野蛮な生活を送り過ぎていた。

彼は相不変人を避けて、山間の自然に親しみ勝ちであつた。どうかすると一夜中、森林の奥を歩き廻つて、冒険を探す事もないではなかつた。その間に彼は大きな熊や猪などを仕止めたことがあつた。また時にはいつになつても春を知らない峰を越えて、岩石の間に棲んでいる大鷲を射殺しにも行つたりした。が、彼は未嘗、その非凡な膂力を尽すべき、手強い相手を見出さなかつた。山の向うに穴居している、慄悍の名を得た侏儒でさえ彼に出合う度毎に、必ず一人ずつは屍骸になつた。彼はその屍骸から奪つた武器や、矢先にかけて鳥獸を時々部落へ持つて歸つた。

その内に彼の武勇の名は、益々多くの敵味方を部落の中につくつて行つた。従つて彼等は機会さえあると、公然と唾み合う事を憚らなかつた。彼は勿論出来るだけ、こう云う争いを起させまいとした。が、彼等は彼等自身のために、彼の意嚮には頓着なく、ほとんど何事にも軋轢し合つた。そこには何か宿命的な、必然の力も動いていた。彼は敵味方の

反目に不快な感じを抱きながら、しかもその反目のただ中へ、我知らず次第に引き込まれて行つた。――

現に一度はこう云うことがあつた。

ある麗かな春の日暮、彼は弓矢をたばさみながら、部落の後に拡がっている草山を独り下つて来た。その時の彼の心の中には、さつき射損じた一頭の牡鹿が、まだ折々は未練がましく、鮮かな姿を浮べていた。ところが草山がやや平になつて、一本の楡の若葉の下に、夕日を浴びた部落の屋根が一目に見えるあたりまで来ると、そこには四五人の若者たちが、一人の若者を相手にして、頻に何か云い争つていた。彼等が皆この草山へ、牛馬を飼いに来るものたちだと云う事は、彼等のまわりに草を食んでいる家畜を見ても明らかであつた。殊にその一人の若者は、彼を崇拜する若者たちの中でも、ほとんど奴僕のごとく彼に仕えるために、反つて彼の反感を買つた事がある男に違ひなかつた。

彼は彼等の姿を見ると、咄嗟に何事か起りそうな、忌わしい予感に襲われた。しかしここへ来かかつた以上、元より彼等の口論を見て過ぎる訳にも行かなかつた。そこで彼はまず見覚えのある、その一人の若者に、

「どうしたのだ。」と声をかけた。

その男は彼の顔を見ると、まるで百万の味方にでも遭つたように、嬉しそうに眼を輝かせながら、相手の若者たちの理不尽な事を滔々と早口にしゃべり出した。何でもその言葉によると、彼等はその男を憎むあまり、彼の飼っている牛馬をも傷けたり虐めたりするらしかった。彼はそう云う不平を鳴す間も、時々相手を睨みつけて、

「逃げるなよ。今に返報をしてやるから。」などと、素戔嗚の勇力を笠に着た、横柄な文句を並べたりした。

## 十

素戔嗚は彼の不平を聞き流してから、相手の若者たちの方を向いて、野蠻な彼にも似合わない、調停の言葉を述べようとした。するとその刹那に彼の崇拜者は、よくよく口惜しさに堪え兼ねたのか、いきなり近くにいた若者に飛びかかると、したたかその頬を打ちのめした。打たれた若者はよろめきながら、すぐにまた相手へ掴みかかった。

「待て。こら、待てと云つたら待たないか。」

こう叱りながら素戔嗚は、無理に二人を引き離そうとした。ところが打たれた若者は、

彼に腕を掴まされると、血迷つた眼を嗔らせながら、今度は彼へ獅噛みついて来た。と同時に彼の崇拜者は、腰にさした鞭をふりかざして、まるで気でも違つたように、やはり口論の相手だつた若者たちの中へ飛びこんだ。若者たちも勿論この男に、おめおめ打たれるよなものばかりではなかつた。彼等は咄嗟に二組に分れて、一方はこの男を囲むが早いか、一方は不慮の出来事に度を失つた素戔鳴へ、紛々と拳を加えに来た。ここに立ち至つてはもう素戔鳴にも、喧嘩に加わるよりほかに途はなかつた。のみならずついに相手の拳が、彼の頭に下つた時、彼は理非も忘れるほど真底から一時に腹が立つた。

たちまち彼等は入り乱れて、互に打つたり打たれたりし出した。あたりに草を食んでいた牛や馬も、この騒ぎに驚いて、四方へ一度に逃げて行つた。が、それらの飼主たちは拳を揮うのに夢中になつて、しばらくは誰も家畜の行方に氣をとめる容子は見えなかつた。が、その内に素戔鳴と争つたものは、手を折られたり、足を挫かれたりして、だんだん浮き足が立つようになつた。そうしてとうとうしまいには、誰からともなく算を乱して、意気地なく草山を逃げ下つて行つた。

素戔鳴は相手を追い払うと、今度は彼の崇拜者が、まだ彼等に未練があるのを押し止めなければならなかつた。

「騒ぐな。騒ぐな。逃げるものは逃がしてやるのが好いのだ。」

若者はやっと彼の手を離れると、べたりと草の上へ坐ってしまった。彼が手ひどく殴られた事は、一面に地腫のした彼の顔が、明白に語っている事実であった。素戔嗚は彼の顔を見ると、腹立たしい心のどん底から、急に可笑しさがこみ上げて来た。

「どうした？ 怪我はしなかったか？」

「何、したってかまいません。今日と云う今日こそあいつらに、一泡吹かせてやったのですから。——それよりあなたこそ、御怪我はありませんか。」

「うん、瘤が一つ出来ただけだった。」

素戔嗚はこう云う一言に忌々しさを吐き出しながら、そこにあつた一本の楡の根本に腰を下した。彼の眼の前には部落の屋根が、草山の腹にさす夕日の光の中に、やはり赤々と浮き上っていた。その景色が素戔嗚には、不思議に感じるくらい平和に見えた。それだけまた今までの格闘が、夢のような気さえしないではなかった。

二人は草を敷いたまま、しばらくは黙って物静な部落の日暮を見下していた。

「どうです。瘤は痛みますか。」

「大して痛まない。」

「米を嚙んでつけて置くと好いそうですよ。」

「そうか。それは好い事を聞いた。」

## 十一

ちようどこの喧嘩と同じように、素戔嗚は次第にある一団の若者たちを嫌でも敵にしな  
ければならなくなつた。しかしそれが数の上から云うと、ほとんどこの部落の若者たちの  
三分の二以上の多数であつた。この連中は彼の味方が、彼を首領と仰ぐように、思兼  
尊みことだの手力雄尊たぢからのおのみことだのと云う年長者ねんちようじやに敬意を払つていた。しかしそれらの尊みことたち  
は、格別彼に敵意らしい何物も持つていないらしかつた。

殊に思兼尊などは、むしろ彼の野蛮な性質に好意を持つているようであつた。現にあの  
草山の喧嘩から、二三日経つたある日の午後、彼が例のごとくたった一人、山の中の古沼  
へ魚を釣りに行つていると、偶然そこへ思兼尊が、これも独り分け入つて来た。そうして  
隔意なく彼と一しよに、朽木の幹へ腰を下して、思いのほか打融けた世間話などをし始め  
た。

尊みことはもう髪も髯も白くなつた老人ではあるが、部落第一の学者でもあり、予かねてまた部落第一の詩人と云う名譽も担になつていた。その上部落の女たちの中には、尊を非凡な呪物まじもの師しのように思っているものもなかりなかつた。これは尊が暇さえあると、山谷さんごくの間をさまよい歩いて、薬草などを採つて来るからであつた。

彼は勿論思兼尊に、反感を抱くべき理由がなかつた。だから糸を垂たれたまま、喜んで尊の話相手になつた。二人はそこで長い間、古沼に臨んだ柳の枝が、銀しろがねのような花をつけた下に、いろいろな事を話し合つた。

「近頃はあなたの剛ごうりき力が、大分だいぶん評判ひょうばんのようじゃありませんか。」  
 しばらくしてから思兼尊は、こう云つて、片頬かたほに笑えみを浮べた。

「評判だけ大きいのです。」

「それだけでも結構ですよ。すべての事は評判があつて、始めてあり甲斐ががあるのですから。」

素戔嗚にはこの答が、一向腑ふに落ちなかつた。

「そうでしょうか。じゃ評判がなかつたら、いくら私が剛力でも——」

「さらに剛力ではなくなるのです。」

「しかし人が掬すくわなくつても、砂しやきん金は始はじめから砂金でしょう。」

「さあ、砂金だとわかるのは、人に掬すくわれてからの上じやありませんか。」

「すると人が、ただの砂を砂金だと思つて掬すくつたら——」

「やはりただの砂でも砂金になるでしょう。」

素戔鳴は何だか思兼尊に、調戯からかわれているような心もちがした。が、そうかと思つて相あ手てを見ても、尊の皺しわだらけな目尻めじりには、ただ微笑が宿すくっているばかりで、人の悪あくそうな気け色しきは少しもなかつた。

「何だかそれじや砂金になつても、つまらないような気がしますが。」

「勿論つまらないものなのですよ。それ以上に考えるのは、考える方が間違まちがっているのです。」

思兼尊はこう云うと、実際つまらなそうな顔をしながら、どこかで摘つまんで来たらしい落ふき藁ぐらの匂においを嗅かぎ始めた。



素戔嗚すさのおはしばらく黙もくっていた。するとまた思兼尊おもいかねのみことが彼の非凡な腕力うでぢからへ途切とぎれた話頭はなごしらを持って行った。

「いつぞや力ちから競くらべがあつた時、あなたと岩を擡もたげ合あつて、死んだ男がいたじゃありませんか。」

「気の毒な事をしたものです。」

素戔嗚は何となく、非難でもされたような心もちになつて、思わず眼を薄うす日びがさした古沼ふるぬまの上へ漂たわせた。古沼の水は底深そこそうに、まわりに芽めぐんだ春の木々をひっそりと仄ほ明めるく映うつしていた。しかし思兼尊は無頓着むとんちやくに、時々露の臺たいへ鼻をやつて、

「気の毒ですが、莫迦ばかげていますよ。第一私わたしに云いわせると、競争する事がすでによろしくない。第二に到底勝かつてそうもない競争きさうをするのが論外ろんがいです。第三に命まで捨すてるに至いたつては、それこそ愚ぐの骨頂こつちやうじゃありませんか。」

「しかし私わたしは何となく気が咎とがめてならないのですが。」

「何、あれはあなたが殺したのじゃありません。力競ちからくらべを面白おもしろがっていた、ほかの若者わかものたちが殺したのです。」

「けれども私はあの連中れんちゆうに、反かえつて憎にくまれてるようです。」

「それは勿論憎まれますよ。その代りもしあなたが死んで、あなたの相手が勝負に勝ったら、あの連中はきつとあなたの相手を憎んだのに違いないでしょう。」

「世の中はそう云うものでしょうか。」

その時尊みことは返事をする代りに、「引いていますよ」と注意した。

素戔鳴はすぐに糸を上げた。糸の先には山目やまめが一尾いちび、澆はつらつと銀のように躍おどっていた。

「魚は人間より幸福ですね。」

尊は彼が竹の枝を山目の顎へ通すのを見ると、またにやにや笑いながら、彼にはほとんど通じない一種の理窟を並べ出した。

「人間が鉤かぎを恐れている内に、魚は遠慮なく鉤を吞んで、楽々と一思いに死んでしまう。私は魚が羨しいような気がしますよ。」

彼は黙つてもう一度、古沼へ糸を抛ほうりこんだ。が、やがて当惑らしい眼を尊へ向けて、「どうもあなたのおっしゃる事は、私にはよく分りませんが。」と云った。

尊は彼の言葉を聞くと、思いのほか真面目まじめな調子になつて、白い顎髯あごひげを捻ひねりながら、「わからない方が結構ですよ。さもないとあなたも私のように、何もする事が出来なくなります。」

「どうしてですか。」

彼はわからないと云う口の下から、すぐまたこう尋ねずにはいられなかった。実際思兼尊の言葉は、真面目とも不真面目ともつかない内に、蜜か毒薬か、不思議なほど心を惹くものが潜んでいたのであった。

「鉤が呑めるのは魚だけです。しかし私も若い時には——」

思兼尊の皺だらけな顔には、一瞬間いつにない寂しそうな色が去来した。

「しかし私も若い時には、いろいろ夢を見た事がありましたよ。」

二人はそれから久しい間、互に別々な事を考えながら、静に春の木々を映している、古沼の上を眺めていた。沼の上には翡翠が、時々水を掠めながら、礫を打つように飛んで行った。

### 十三

その間もあの快活な娘の姿は、絶えず素戔嗚の心を領していた。殊に時たま部落の外で、偶然彼女と顔を合わせると、ほとんどあの山腹の柏の下で、始めて彼女と遇った時

のように、訳もなく顔が熱くなったり、胸がはずんだりするのが常であった。が、彼女はいつも取澄まして、全然彼を見知らないかのごとく、頭を下げる容子も見せなかった。――

ある朝彼は山へ行く途中、ちようど部落のはずれにある噴き井の前を通りかかると、あの娘が三四人の女たちと一しよに、水甕へ水を汲んでゐるのに遇つた。噴き井の上には白椿が、まだ疎に咲き残つて、絶えず湧きこぼれる水の水沫は、その花と葉とを洩れる日の光に、かすかな虹を描いていた。娘は身をかがめながら、苔蒸した井筒に溢れる水を素焼の甕へ落していたが、ほかの女たちはもう水を汲み了えたのか、皆甕を頭に載せて、しつきりなく飛び交う燕の中を、家々へ帰ろうとする所であつた。が、彼がそこへ来た途端に、彼女は品良く身を起すと、一ぱいになつた水甕を重そうに片手に下げたまま、ちらりと彼の顔へ眼をやつた、そうしていつになく、人懐しげに口元へ微笑を浮べて見せた。

彼は例の通り当惑しながら、ちよいと挨拶の點頭を送つた。娘は水甕を頭へ載せながら、眼でその挨拶に答えると、仲間の女たちの後を追つて、やはり釘を撒くような燕の中を歩き出した。彼は娘と入れ違いに噴井の側へ歩み寄つて、大きな掌へ掬つた水に、二三口喉を沾した。沾しながら彼女の眼つきや唇の微笑を思い浮べて、何か嬉しいような、

恥かしいような心もちに顔を赤めていた。と同時にまた己自身を嘲りたいような気もしないではなかった。

その間に女たちはそよ風に領巾を翻しながら、頭の上の素焼の甕にさわやかな朝日の光を浴びて次第に噴き井から遠ざかつて行つた。が、間もなく彼等の中からは一度に愉快そうな笑い声起つた。それにつれて彼等のある者は、笑顔を後へ振り向けながら、足も止めずに素戔鳴の方へ、嘲るような視線を送りなぞした。

噴き井の水を飲んでいた彼は、幸その視線に煩わされなかつた。しかし彼等の笑い声を聞くと、いよいよ妙に間が悪くなつて、今更飲みたくもない水を、もう一杯手で掬つて飲んだ。すると中高になつた噴き井の水に、意外にも誰か人の姿が、咄嗟に覺束ない影を落した。素戔鳴は慌てた眼を挙げて、噴き井の向うの白椿の下へ、鞭を持つた一人の若者が、のそのそと歩み寄つたのと顔を合せた。それは先日草山の喧嘩に、とうとう彼まで巻添えにした、あの牛飼の崇拜者であつた。

「お早うございます。」

若者は愛想笑いを見せながら、恭しく彼に会釈をした。

「お早う。」

彼はこの若者にまで、狼狽した所を見られたかと思うと、思わず顔をしかめずにはいられなかった。

## 十四

が、若者はさり気ない調子で、噴き井の上に枝垂れかかった白椿の花を、りながら、「もう瘤は御癒りですか。」

「うん、とうに癒った。」

彼は真面目にこんな返事をした。

「生米を御つけになりましたか。」

「つけた。あれは思ったより利き目があるらしかった。」

若者は、った椿の花を噴き井の中へ抛りこむと、急にまたにやにや笑いながら、

「じゃもう一つ、好い事を御教えしましょうか。」

「何だ。その好い事と云うのは。」

彼が不審そうにこう問返すと、若者はまだ意味ありげな笑を頬に浮べたまま、

「あなたの頸くびにかけて御出でになる、勾玉まがたまを一つ頂かせて下さい。」と云った。

「勾玉をくれ？ くれと云えばやらないものでもないが、勾玉を貰ってどうするのだ？」

「まあ、黙って頂かせて下さい。悪いようにはしませんから。」

「嫌だ。どうするのだか聞かない内は、勾玉なぞをやる訳には行かない。」

素戔嗚すさのおはそろそろ焦れ出しながら、突慳貪つつけんとんに若者の請こいを却しりぞけた。すると相手は狡猾こうかつ

そうに、じろりと彼の顔へ眼をやつて、

「じゃ云いますよ。あなたは今ここへ水を汲みに来ていた、十五六の娘が御好きでしょう。」

彼は苦にがい顔をして、相手の眉まゆの間を睨にらみつけた。が、内心は少からず、狼狽ろうばいに狼狽を

重ねていた。

「御好きじゃありませんか、あの思兼尊おもいかねのみことの姪めいを。」

「そうか。あれは思兼尊の姪か。」

彼は際きわどい声を出した。若者はその容ようす子を見ると、凱歌がいかを挙げるように笑い出した。

「そら、御覧なさい。隠したつてすぐに露あられます。」

彼はまた口を噤つぶんで、じつと足もとの石を見つめていた。水沫しづきを浴びた石の間には、疎まぼら

に羊齒しだの葉が芽ぐんでいた。

「ですから私に勾玉を一つ、御よこしなさいと云うのです。御好きならまた御好きなように、取計らいようもあるじやありませんか。」

若者は鞭むちもてを弄あそびながら、透すかさず彼を追窮きゆうした。彼の記憶には二三日前に、思兼尊と話し合つた、あの古沼のほとりの柳の花が、たちまち鮮あざやかに浮んで来た。もしあの娘が尊の姪なら——彼は眼を足もとの石から挙げると、やはり顔をしかめたなり、

「そうして勾玉をどうするのだ？」と云つた。

しかし彼の眼の中には、明かに今まで見えなかつた希望の色が動いていた。

## 十五

若者の答えは無造作むぞうさであつた。

「何、その勾玉をあの娘に渡して、あなたの思召しめぞしを伝えるのです。」

素戔嗚すさのおはちよいとためらつた。この男の弁舌べんぜつを弄ろうする事は、何となく彼には不快であつた。と云つて彼自身、彼の心を相手に訴えるだけの勇氣もなかつた。若者は彼の醜い顔に



躑躅ちゆうちよの色が動くのを見ると、わぎと冷やかに言葉を継いだ。

「御嫌おいやなら仕方はありませんが。」

二人はしばらくの間黙っていた。が、やがて素戔嗚は頸くびに懸けた勾玉まがたまの中から、美しい琅玕ろうかんの玉を抜いて、無言のまま若者の手に渡した。それは彼が何よりも、大事にかけて持っている、歿なくなつた母の遺物かたみであつた。

若者はその琅玕に物欲しそうな眼を落しながら、

「これは立派な勾玉ですね、こんな性たちの好い琅玕は、そう沢山にありますまい。」

「この国の物じゃない。海の向うにいる玉造たまつくりが、七日七晩磨なぬかななばんいたと云う玉だ。」

彼は腹立たしそうにこう云うと、くるりと若者に背せなを向けて、大股に嘖ふき井いから歩み去つた。若者はしかし勾玉を掌てのひらの上に載せながら、慌あわてて後を追いかけて来た。

「待っていて下さい。必ず二三日中には、吉左右きつそを御聞かせしますから。」

「うん、急がなくて好いが。」

彼等は倭衣しずりの肩を並べて、絶え間なく飛び交かう燕つばくらの中を山の方へ歩いて行つた。後には若者の投げた椿の花が、中高なかだかになつた嘖ふき井いの水に、まだくるくる廻りながら、流れもせず浮んでいた。

その日の暮方、若者は例の草山の楡の根がたに腰を下して、また素戔嗚に預けられた勾玉を掌へ載せて見ながら、あの娘に云い寄るべき手段をいろいろ考えていた。するとそこへもう一人の若者が、斑竹の笛を帯へさして、ぶらりと山を下つて来た。それは部落の若者たちの中でも、最も精巧な勾玉や釧の所有者として知られている、背の高い美貌の若者であった。彼はそこを通りかかると、どう思ったかふと足を止めて、楡の下の若者に「おい、君。」と声をかけた。若者は慌てて、顔を挙げた。が、彼はこの風流な若者が、彼の崇拜する素戔嗚の敵の一人だと云う事を承知していた。そこでいかにも無愛想に、「何か御用ですか。」と返事をした。

「ちよいとその勾玉を見せてくれないか。」

若者は苦い顔をしながら、琅玕を相手の手に渡した。

「君の玉かい。」

「いいえ、素戔嗚尊の玉です。」

今度は相手の若者の方が、苦い顔をせずにはいられなかった。

「じゃいつもあの男が、自慢そうに下げている玉だ。もつともこのほかに下げているのは、石塊同様の玉ばかりだが。」

若者は毒どくぐち口を利きながら、しばらくその勾玉まてあそを弄んでいたが、自分もその楡の根がたへ楽々と腰を下すと、

「どうだろう。物は相談と云うが、一つ君の計らいで、この玉を僕に売ってくれまいか。」と、大胆な事を云い出した。

## 十六

牛飼いの若者は否いやと返事をする代りに、頬ほおを脹ふくらせたまま黙っていた。すると相手は流し眼に彼の顔を覗きこんで、

「その代り君には御礼をするよ。刀が欲しければ刀を進上するし、玉が欲しければ玉も進上するし、——」

「駄目ですよ。その勾まがたま玉は素すさ戔の鳴のみ尊ことが、ある人に渡してくれと云って、私に預けた品なのですから。」

「へええ、ある人へ渡してくれ？　ある人と云うのは、ある女と云う事かい。」  
相手は好奇心を動かしたと見えて、急に気ごんだ調子になった。

「女でも男でも好いじやありませんか。」

若者は余計なおしやべりを後悔しながら面倒臭そうにこう答を避けた。が、相手は腹を立てた気色もなく、反つて薄気味が悪いほど、優しい微笑を漏らしながら、

「そりやどつちでも好いさ。どつちでも好いが、その人へ渡す品だったら、そこは君の働き一つで、ほかの勾玉を持って行つても、大した差支はなさそうじやないか。」

若者はまた口を噤んで、草の上へ眼を反らせていた。

「勿論多少は面倒が起るかも知れないさ。しかしそのくらいな事はあつても、刀なり、玉なり、鎧なり、乃至はまた馬の一匹なり、君の手にはいった方が——」

「ですがね、もし先方が受け取らないと云つたら、私はこの玉を素戔鳴尊へ返さなければならぬのですよ。」

「受け取らないと云つたら？」

相手はちよいと顔をしかめたが、すぐに優しい口調に返つて、

「もし先方が女だったら、そりや素戔鳴の玉などは受け取らないね。その上こんな琅玕は、若い女には似合わないよ。だから反つてこの代りに、もっと派手な玉を持って行けば、案外すぐに受け取るかも知れない。」

若者は相手の云う事も、一理ありそうな気がし出した。実際いかに高貴な物でも、部落の若い女たちが、こう云う色の玉を好むかどうか、疑わしいには違いなかつたのであつた。

「それからだね——」

相手は唇を舐めながら、いよいよもともらしく言葉継いだ。

「それからだね、たとい玉が違つたにしても、受け取つて貰つた方が、受け取らずに返されるよりは、素戔鳴も喜ぶだろうじゃないか。して見れば玉は取り換えた方が、反つて素戔鳴のためになるよ。素戔鳴のためになつて、おまけに君が刀でも、馬でも手に入れるとなれば、もう文句はない筈だね。」

若者の心の中には、両方に刃のついた劍やら、水晶を削つた勾玉やら、遅ましい月毛の馬やらが、はつきりと浮び上つて来た。彼は誘惑を避けるように、思わず眼をつぶりながら、二三度頭を強く振つた。が、眼を開けると彼の前には、依然として微笑を含んでいる、美しい相手の顔があつた。

「どうだろう。それでもまだ不服かい。不服なら——まあ、何とか云うよりも、僕の所まで来てくれ給え。刀も鎧もちょうど君に御誂えなのがある筈だ。厩には馬も五六匹いる。」

相手は飽くまでも滑な舌を弄しながら気軽く楡の根がたを立ち上った。若者はやはり黙念と、煮え切らない考えに沈んでいた。しかし相手が歩き出すと、彼もまたその後から、重そうな足を運び始めた。――

彼等の姿が草山の下に、全く隠れてしまった時、さらに一人の若者が、のそのそこへ下つて来た。夕日の光はとうに薄れて、あたりにはもう靄さえ動いていたが、その若者が素戔鳴だと云う事は、一目見てさえ知れる事であった。彼は今日射止めたらしい山鳥を二三羽肩にかけて、悠々と楡の下まで来ると、しばらく疲れた足を休めて、暮色の中に横たわっている部落の屋根を見下した。そうして独り唇に幸福な微笑を漂わせた。何も知らない素戔鳴は、あの快活な娘の姿を心に思い浮べたのであった。

## 十七

素戔鳴は一日一日と、若者の返事を待ち暮した。が、若者はいつになっても、容易に消息を齎さなかつた。のみならず故意か偶然か、ほとんどその後素戔鳴とは顔も合さないくらいであった。彼は若者の計画が失敗したのではないかと思つた。そのために彼と会う事

が恥しいのではないかと思つた。が、そのまた一方では、やはりまだあの快活な娘に、近づく機会がないのかも知れないと思ひ返さずにはいられなかつた。

その間に彼はあの娘と、朝早く同じ噴き井の前で、たつた一度落合つた事があつた。娘は例のごとく素焼の甕を頭の上に載せながら、四五人の部落の女たちと一しよに、ちようど白樫の下を去ろうとしていた。が、彼の顔を見ると、彼女は急に唇を歪めて、蔑むような表情を水々しい眼に浮べたまま、昂然と一人先に立つて、彼の傍を通り過ぎた。

彼はいつもの通り顔を赤めた上に、その日は何とも名状し難い不快な感じまで味わされた。「おれは莫迦だ。あの娘はたとい生まれ變つても、おれの妻になるような女ではない。」——そう云う絶望に近い心もちも、しばらくは彼を離れなかつた。しかし牛飼の若者が、否やの返事を持つて来ない事は、人の好い彼に多少ながら、希望を抱かせる力になつた。彼はそれ以来すべてをこの未知の答に懸けて、二度と苦しい思ひをしないたために、当分はあの噴き井の近くへも立ち寄るまいと私かに決心した。

ところが彼はある日の日暮、天の安河の河原を歩いていると、折からその若者が馬を洗つているのに出会つた。若者は彼に見つかつた事が、明かに気まずいようであつた。同時に彼も何となく口が利き悪い気もちになつて、しばらくは入日の光に煙つた河原蓬の

中へ佇みながら、艶々と水をかぶっている黒馬の毛並を眺めていた。が、追い追いな沈黙が、妙に苦しくなり始めたので、とり敢えず話題を開拓すべく、目前の馬を指さしながら、

「好い馬だな。持主は誰だい。」と、まず声をかけた。すると意外にも若者は得意らしい眼を挙げて、

「私です。」と返事をした。

「そうか。そりや——」

彼は感嘆の言葉を呑みこむと、また元の通り口を噤んでしまった。が、さすがに若者は素知らぬ顔も出来ないと見えて、

「先達あの勾玉を御預りしましたが——」と、ためらい勝ちに切り出した。

「うん、渡してくれたかい。」

彼の眼は子供のようになり、純粹な感情を湛えていた、若者は彼と眼を合わすと、慌ててその視線を避けながら、故に馬の足搔くのを叱って、

「ええ、渡しました。」

「そうか。それでおれも安心した。」



「ですが——」

「ですが？ 何だい。」

「急には御返事が出来ないと言う事でした。」

「何、急がなくても好い。」

彼は元氣よくこう答えると、もう若者には用がないと云ったように、夕霞のたなびいた春の河原を元来た方へ歩き出した。彼の心の中には、今までにない幸福の意識が波立っていた。河原蓬も、空も、その空に一羽啼いている雲雀も、ことごとく彼には嬉しそうであった。彼は頭を挙げて歩きながら、危く霞に紛れそうな雲雀と時々話をした。

「おい、雲雀。お前はおれが羨ましそうだな。羨ましくない？ 嘘をつけ。それなら何故そんなに啼き立てるのだ。雲雀。おい、雲雀。返事をしないか。雲雀。……」

## 十八

素戔嗚はそれから五六日の間、幸福そのもののような日を送った。ところがその頃から部落には、作者は誰とも判然しない、新しい歌が流行り出した。それは醜い山鴉が美

しい白鳥はくちように恋をして、ありとあらゆる空の鳥の晒わらい物になったと云う歌であった。彼はその歌が唱われるのを聞くと、今まで照していた幸福の太陽に、雲が懸ったような心もちがした。

しかし彼は多少の不安を感じながら、まだ幸福の夢から覚めずにいた。すでに美しい白鳥は、醜い山鴉の恋を容ゆるれてくれた。ありとあらゆる空の鳥は、愚おろかな彼を晒わらうのではなく、反かえつて仕合せな彼を羨うらやんだり妬そねんだりしているのであった。——そう彼は信じていた。少くともそう信ぜずにはいられないような気がしていた。

だから彼はその後また、あの牛飼の若者に遇あつた時も、ただ同じ答を聞きたいばかりに、「あの勾まがたま玉は確かに渡してくれたのだろうか。」と、軽く念を押しただけであった。若者はやはり間の悪るような顔をしながら、

「ええ、確かに渡しました。しかし御返事の所は——」とか何とか、曖あいまい昧まいに言葉を濁していた。それでも彼は渡したと云う言葉に満足して、その上立ち入った事情などは尋ねようとも思わなかった。

すると三四日経ったある夜の事、彼が山へ寝鳥ねどりでも捕えに行こうと思つて、月明りを幸さいわい、部落の往来を独りぶらぶら歩いていると、誰か笛を吹きすさびながら、薄い霧もやの下おりた中

を、これも悠々と来かかるものがあつた。野蠻な彼は幼い時から、歌とか音楽とか云うものにはさらに興味を感じなかつた。が、藪木の花の匂のする春の月夜に包まれながら、だんだんこちらへやつて来る笛の声に耳を傾けるのは、彼にとつても何となく、心憎い気のあるものであつた。

その内に彼とその男とは、顔を合せるばかりに近くなつて来た。しかし相手は鼻の先へ来ても、相不変笛を吹き止めなかつた。彼は路を譲りながら、天心に近い月を負つて、相手の顔を透かして見た。美しい顔、燦びやかな勾玉、それから口に当てた斑竹の笛――相手はあの背の高い、風流な若者に違いなかつた。彼は勿論この若者が、彼の野性を軽蔑する敵の一人だと云うことを承知していた。そこで始は昂然と肩を挙げて、挨拶もせずに通り返ぎようとした。が、いよいよ二人がすれ違おうとした時、何かがもう一度彼の眼を若者の体へ惹きつけた。と、相手の胸の上には、彼の母が遺物に残した、あの琅玕の勾玉が、曇りない月の光に濡れて、水々しく輝いていたではないか。

「待て。」

彼は咄嗟に腕を伸ばすと、若者の襟をしつかり掴んだ。

「何をする。」

若者は思わずよろめきながら、さすがに懸命の力を絞しぼつて、とられた襟を振り離そうとした。が、彼の手はさながら万力まんりきにかけたごとく、いくらもがいても離れなかった。

## 十九

「貴様はこの勾玉まがたまを誰に貰もらった？」

素戔鳴すさのおは相手の喉のどをしめ上げながら噛かみつくようにこう尋ねた。

「離せ。こら、何をする。離さないか。」

「貴様が白状するまでは離さない。」

「離さないと——」

若者は襟を取られたまま、斑竹はんちくの笛をふり上げて、横払いに相手を打とうとした。が、素戔鳴は手もとを緩ゆるめるまでもなく、遊んでいた片手を動かして、苦もなくその笛ねを取ってしまった。

「さあ、白状しろ。さもないと、貴様を絞しめ殺ころすぞ。」

実際素戔鳴の心の中には、狂暴な怒が燃え立っていた。

「この勾玉は——おれが——おれが馬と取換えたのだ。」

「嘘をつけ。これはおれが——」

「あの娘に」と云う言葉が、何故か素戔嗚の舌を硬こわばらせた。彼は相手の蒼ざめた顔に熱い息を吹きかけながら、もう一度唸うなるような声を出した。

「嘘をつけ。」

「離さないか。貴様こそ、——ああ、喉が絞しまる。——あれほど離すと云った癖に、貴様こそ嘘をつく奴だ。」

「証拠があるか、証拠が。」

すると若者はまだ必死に、もがきながら、

「あいつに聞いて見るが好い。」と、吐き出すような、一ひと言を洩らした。「あいつ」が

あの牛飼いの若者であると云う事は、怒り狂った素戔嗚にさえ、問うまでもなく明かであった。

「よし。じゃ、あいつに聞いて見よう。」

素戔嗚は言下ごんかに意を決すると、いきなり相手を引つ立てながら、あの牛飼いの若者がたつた一人住んでいる、そこを余り離れていない小家こいえの方へ歩き出した。その途中も時々相

手は、襟にかかった素戔嗚の手を一生懸命に振り離そうとした。しかし彼の手は相不変、鉄のようになりすっかり相手を捉えて、打つても、叩いても離れなかった。

空には依然として、春の月があつた。往来にも藪木の花の匂が、やはりうす甘く立ち罩めていた。が、素戔嗚の心の中には、まるで大暴風雨の天のように、渦巻く疑惑の雲を裂いて、憤怒と嫉妬との稲妻が、絶え間なく閃き飛んでいた。彼を欺いたのはあの娘であるか。それとも牛飼いの若者であろうか。それともまたこの相手が何か狡猾な手段を弄して、娘から勾玉を巻き上げたのであろうか。……

彼は、彼はずるずる若者を引きずりながら、とうとう目ざす小家まで来た。見ると幸小家の主人は、まだ眠らずにいると見えて、仄かな一盞の燈火の光が、戸口に下げた簾の隙から、軒先の月明と鬩いでいた。襟をつかまれた若者は、ちやうどこの戸口の前へ来た時、始めて彼の手から自由になろうとする、最後の努力に成功した、と思うと時ならない風が、さつと若者の顔を払って、足さえ宙に浮くが早いか、あたりが俄に暗くなって、ただ一しきり火花のような物が、四方へ散乱するような心もちがした。——彼は戸口へ来ると同時に、犬の子よりも造作なく、月の光を堰いた簾の内へ、まっさかさまに投げこまれたのであつた。

## 二十

家の中にはあの牛飼の若者が、土器にともした油火の下に、夜なべの藁沓を造っていた。彼は戸口に思いがけない人のけはいが聞えた時、一瞬間忙しい手を止めて、用心深く耳を澄ませたが、その途端に軒の簾が、大きく夜を煽つたと思うと、突然一人の若者が、取り乱した藁のまん中へ、仰向けざまに転げ落ちた。

彼はさすがに胆を消して、うつかりあぐらを組んだまま、半ば引きちぎられた簾の外へ、思わず狼狽の視線を飛ばせた。するとそこには素戔嗚が、油火の光を全身に浴びて、顔中に怒りを漲らせながら、小山のごとく戸口を塞いでいた。若者はその姿を見るや否や、死人のような色になって、しばらくただ狭い家の中をきよろきよろ見廻すよりほかはなかつた。素戔嗚は荒々しく若者の前へ歩み寄ると、じつと彼の顔を睨み据えて、

「おい、貴様は確かにあの娘へ、おれの勾玉を渡したと云つたな。」と忌々しそうな声をかけた。

若者は答えなかつた。

「それがこの男の頸くびに懸かかっているのは一体どうした始末なのだ？」

素戔嗚はあの美貌の若者へ、燃えるような瞳ひとみを移した。が、彼はやはり藁の中に、気を失ったのか、仮死そらじにか、眼を閉じたまま倒れていた。

「渡したと云うのは嘘か？」

「いえ、嘘じゃありません。ほんとうです。ほんとうです。」

牛飼いの若者は、始めて必死の声を出した。

「ほんとうですが、——ですが、実はあの琅玕ろうかんの代りに、珊瑚さんごの——その管玉くだたまを……」

「どうしてまたそんな真似まねをしたのだ？」

素戔嗚の声は雷いかづちのごとく、度を失ほどった若者の心を一言毎ひとことごとに打ち砕いた。彼はとうとうしどろもどろに、美貌の若者が勧める通り、琅玕と珊瑚と取り換えた上、礼には黒馬を貰った事まで残りなく白状してしまった。その話を聞いている内に、刻々素戔嗚の心の中うちには、泣きたいような、叫びたいような息苦しい羞憤しゅうぶんの念が、大風のごとく昂たかまって来た。

「そうしてその玉は渡したのだな。」

「渡しました。渡しましたが——」



若者は逡巡した。

「渡しましたが——あの娘は——何しろああ云う娘ですし、——はくちよう白鳥はやまがらす山鴉にな  
どと——、失礼な口上ですが、——受け取らないと申し——」

若者は皆まで云わない内に、仰向けにどうと蹴倒された。蹴倒されたと思うと、大きな拳がしたたか彼の頭を打った。その拍子に燈火の盞が落ちて、あたりの床に乱れた藁は、たちまち、一面の炎になった。牛飼いの若者はその火に毛脛を焼かれながら、悲鳴を挙げ、飛び起きると、無我夢中に高這いをして、裏手の方へ逃げ出そうとした。

怒り狂った素戔嗚は、まるで傷いた猪のように、猛然とその後から飛びかかった。いや、將に飛びかかろうとした時、今度は足もとに倒れていた、美貌の若者が身を起すと、これも死物狂に剣を抜いて、火の中に片膝ついたまま、いきなり彼の足を払おうとした。

## 二十一

その剣の光を見ると、突然素戔嗚の心の中には、長い間眠っていた、流血に憧れる野性が目ざめた。彼は素早く足を縮めて、相手の武器を飛び越えようと、咄嗟に腰の剣を抜いて、

牛の吼ほえるような声を挙げた。そうしてその声を挙げるが早いか、無二無三むにむさんに相手へ斬つてかかった。彼等の剣は凄じい音を立てて、濛々もうもうと渦巻く煙の中に、二三度眼に痛い火花を飛ばせた。

しかし美貌の若者は、勿論彼の敵ではなかった。彼の振り廻す幅広の剣は、一太刀毎ひとたちごとにこの若者を容赦ようしやなく死地へ追いこんで行った。いや、彼は数合の内に、ほとんど一気に相手の頭を斬り割る所まで肉薄していた。するとその途端に甕かめが一つ、どこからか彼の頭を目がけて、勢い好く宙を飛んで来た。が、幸さいわいそれは狙ねらいが外それて、彼の足もとへ落ちると共に、粉微塵こなみじんに砕けてしまった。彼は太刀打を続けながら、猛り立たけった眼を挙げて、忙いそがわしく家の中を見廻した。見廻すと、裏手の蓆戸むしろどの前には、さっき彼に後を見せた、あの牛飼いの若者が、これも眼を血走らせたまま、相手の危急を救うべく、今度は大きな桶を一つ、持ち上げている所であった。

彼は再び牛のような叫び声を挙げながら、若者が桶を投げるより先に、渾身の力を剣にこめて、相手の脳天へ打ち下そうとした。が、その時すでに大きな桶は、炎の空に風を切って、がんと彼の頭に中あたった。彼はさすがに眼が眩くらんだのか、大風に吹かれた旗竿はたざおのように思わずよろよろ足を乱して、危くそこへ倒れようとした。その暇に相手の若者は、奮

然と身を躍らせると、——もう火の移った簾すだれを衝ついて、片手に剣つるぎを提ひげながら、静な外の春の月夜へ、一目散に逃げて行つた。

彼は歯を喰いしばつたまま、ようやく足を踏み固めた。しかし眼を開あいて見ると、火と煙あふとに溢あふれた家の中には、とうに誰もいなくなつていた。

「逃げたな、何、逃げようと云つても、逃がしはしないぞ。」

彼は髪も着物も焼かれながら、戸口の簾すだれを切り払つて、蹠そうろうと家の外へ出た。月つきあか

明りに照らされた往来は、屋根を燃え抜いた火の光を得て、真昼のように明るかつた。そうしてその明るい往来には、部落の家々から出て来た人の姿が、黒々と何人も立ち並んでいた。のみならずその人影は、剣を下げた彼を見ると、誰からともなく騒さわぎ立って、「素す々々だ。素々すすだ。」と呼よび交かわす声こゑが、たちまち高くなり始めた。彼はそう云う声を浴びて、しばらくはぼんやり佇たたずんで居た。また実際それよりほかに、何の分別もつかないほど、殺氣立つた彼の心こゝろの中には、氣も狂いそうな混乱こんらんが、益々烈れつしくなつて居たのであつた。

その内に往来の人影は、見る見る数を加え出した。と同時に騒さわがしい叫こゝろび声も、いつか憎にく悪にくを孕はらんで居る險けん悪あくな調子を帯おび始めた。

「火つけを殺せ。」

「盗人ぬすびとを殺せ。」

「素戔鳴を殺せ。」

## 二十二

この時部落うしろの後に、草山くさやまの楡にれの木の下には、髯ひげの長い一人の老人が天心の月を眺めながら、悠々と腰を下していた。物静な春の夜よは、藪木やぶきの花のかすかな匂においを柔かく露もやに包んだまま、ここでもただ梟ふくろうの聲が、ちょうど山その物の吐息といきのように、一天まばらの疎な星の光を時々曇らせているばかりであった。

が、その内に眼の下の部落からは、思いもよらない火事の煙が、風の断たえた中空なかぞらへ一すじまっ直すぐに上り始めた。老人はその煙の中に立ち昇る火の粉を眺めても、やはり膝を抱きながら、気楽そうに小聲の歌を唱つて、一向驚くらしい気色けしきも見せなかった。しかし間もなく部落からは、まるで蜂はちの巣を壊こわしたような人どよめきの音が聞えて来た。のみならずその音は次第に高くざわめき立って、とうとう戦たたかいでも起ったかと思う、烈しい喊かんせい声せいさえ伝わり出した。これにはさすがの老人も、いささか意外な気がしたと見えて、白い眉まゆを

ひそめながら、おもむろに腰を擡げると、両手を耳へ当てがって、時ならない部落の騒動をじつと聞き澄まそうとするらしかった。

「はてな。劍の音なぞもするようだが。」

老人はこう呟きながら、しばらくはそこに伸び上って、絶えず金粉を煽っている火事の煙に見入っていた。

するとほどなく部落から、逃げて来たらしい七八人の男女が、喘ぎ喘ぎ草山へ上って来た。彼等のある者は髪を垂れた、十には足りない童児であった。ある者は肌も見えなくらい、襟や裳紐を取り乱した、寝起きらしい娘であった。そうしてまたある者は弓よりも猶腰の曲った、立居さえ苦しそうな老婆であった。彼等は草山の上まで来ると、云い合せたように皆足を止めて、月夜の空を焦している部落の火事へ眼を返した。が、やがてその中の一人が、楡の根がたに佇んだ老人の姿を見るや否や、気づかわしように寄り添った。この足弱の一群からは、「思兼尊、思兼尊。」と云う言葉が、ため息と一しよに溢れて来た。と同時に胸も露わな、夜目にも美しい娘が一人、「伯父様。」と声をかけながら、こちらを振り向いた老人の方へ、小鳥のように身軽く走り寄った。

「どうしたのだ、あの騒ぎは。」

思兼尊はまだ眉をひそめながら、取りすがった娘を片手に抱いて、誰にともなくこう尋ねた。

「素戔嗚尊がどうした事か、急に乱暴を始めたとか申す事でございますよ。」

答えたのはあの快活な娘でなくて、彼等の中に交っていた、眼鼻も見えないような老婆であつた。

「何、素戔嗚尊が乱暴を始めた？」

「はい、それ故大勢の若者たちが、尊を擲めようと致しますと、平生尊の味方をする若者たちが承知致しませんで、とうとうあのようになんにもない、大騒動が始まったそうでございますよ。」

思兼尊は考え深い目つきをして、部落に上っている火事の煙と、尊の胸にすがっている娘の顔とを見比べた。娘は月に照らされたせいか、鬢の乱れた頬の色が、透き徹るかと思うほど青ざめていた。

「火を弄ぶものは、気をつけないと、——素戔嗚尊ばかりではない。火を弄ぶものは、気をつけないと——」

尊は皺だらけな顔に苦笑を浮べて、今はさらに拡がったらしい火の手を遙に眺めながら、

黙つて震ふるえている姪めいの髪かみを劬いたむるように撫なでてやった。

## 二十三

部落の戦いは翌よくちよう朝あすまで続いた。が、寡かはついに衆の敵ではなかつた。素戔すさの鳴おは味方あひまの若者たちと共に、とうとう敵の手に生い捉とられた。日頃彼に悪意を抱いていた若者たちは、鞠まりのように彼を縛いめした上、いろいろ乱暴な凌りよう辱じよくを加えた。彼は打たれたり蹴けられたりする度たびごと毎ごとに、ごろごろ地上を転がりまわつて、牛の吼ほえるような怒声を挙げた。

部落らうにやくの老らう若にやくはことごとく、律おきて通り彼を殺して、騒動の罪を贖つぐなわせようとした。が、おもいかねのみこと、たちからおのみこと、思おも兼かね尊のみことと手力雄尊たぢからおのみことと、この二人の勢力家だけは、容易に賛同の意を示さなかつた。手力雄尊は素戔すさの鳴おの罪を憎みながらも、彼の非凡りよりよくな膂り力りよくには愛惜の情を感じてゐた。これは同時にまた思兼尊が、むぎむぎ彼ほどの若者を殺したくない理由でもあつた。のみならず尊のみことは彼ばかりでなく、すべて人間を殺すと云う事に、極端けんおな嫌悪けんおを抱いてゐた。

部落の老若は彼の罪を定さだめるために、三日の間議論を重ねた。が、二人の尊たちはどう

しても意見を改めなかった。彼等はそこで死刑の代りに、彼を追放に処する事にした。しかしこのまま、彼の縄を解いて、彼に広い国外の自由の天地を与えるのは、到底彼等の忍び難い、寛大に過ぎた処置であつた。彼等はまず彼の鬚を、一本残らずむしり取つた。それから彼の手足の爪を、まるで貝でも剥がすように、未練未釈なく抜いてしまった。その上彼の縄を解くと、ほとんど手足も利かない彼へ、手ん手に石を投げつけたり、慄悍な狩犬をけしかけたりした。彼は血にまみれながら、ほとんど高這いをしないばかりに、蹠跟と部落を逃れて行つた。

彼が高天原の国をめぐる山々の峰を越えたのは、ちょうどその後二日経つた、空模様  
の怪しい午後であつた。彼は山の頂きへ来た時、峻しい岩むらの上へ登つて、住み慣れた  
部落の横わつている、盆地の方を眺めて見た。が、彼の眼の下には、ただうす白い霧の海  
が、それらしい平地をぼんやりと、透かして見せるばかりであつた。彼はしかし岩の上に、  
朝焼の空を負いながら、長い間じつと坐つていた。すると谷間から吹き上げる風が、昔  
の通り彼の耳へ、聞き慣れた囁きを送つて来た。「素戔嗚よ。お前は何をさがしているの  
だ。おれと一しよに来い。おれと一しよに来い。素戔嗚よ。……」

彼はようやく立ち上つた。そうしてまだ知らない国の方へ、おもむろに山を下り出した。



その内に朝焼の火照りが消えると、ぽつぽつ雨が落ちはじめた。彼は一枚の衣のほかに、何もまとつてはいなかった。頸珠や剣は云うまでもなく、生掬りになった時に奪われていた。雨はこの追放人の上に、おいおい烈しくなり始めた。風も横なぐりに落して来ては、時々ずぶ濡れになった衣の裾を裸の脚へたたきつけた。彼は菌を食いしばりながら、足もとばかり見つめて歩いた。

實際眼に見えるものは、足もとに重なる岩だけであった。そのほかは一面に暗い霧が、山や谷を封じていた。霧の中では風雨の音か、それとも谷川の水の音か、凄じくざつと遠お近ちこちに煮えくり返る音があった。が、彼の心の中には、それよりもさらに凄じく、寂しい怒が荒れ狂っていた。

## 二十四

やがて足もとの岩は、湿った苔こけになった。苔はまた間もなく、深い羊齒しだの茂みになった。それから丈たけの高い熊笹くまざさに、——いつの間にか素戔すさ鳴のは、山の中腹を埋うづめている森林の中へはいったのであった。

森林は容易に尽きなかつた。風雨も依然として止まなかつた。空には樅もみや榊とがの枝が、暗い霧を払いながら、悩ましい悲鳴を挙げていた。彼は熊笹を押し分けて、遮しや二無にむ二その中を下つて行つた。熊笹は彼の頭を埋めて、絶えず濡れた葉を飛ばせていた。まるで森全体が、彼の行手を遮さえぎるべく、生きて動いているようであつた。

彼は休みなく進み続けた。彼の心の内には相あ不か変わ鬱う勃つとして怒が燃え上つていた。が、それにも関らず、この荒れ模様つたかずらの森林には、何か狂暴な喜びを眼ざまさせる力があるらしかつた。彼は草木や蔦つたかずら蘿らを腕一ぱいに搔かきのけながら、時々大きな声を出して、吼うなつて行く風雨に答えたりした。

午ひるもやや過ぎた頃、彼はとうとう一すじの谷川に、がむしやらかな進路を遮られた。谷川の水のたぎる向うは、削けずつたような絶壁であつた。彼はその流れに沿つて、再び熊笹を掻き分けて行つた。するとしばらくして向うの岸へ、藤ふじ蔓づるを編んだ栈橋かけはしが、水みず煙けむりと雨のしづきとの中に、危く懸つてゐる所へ出た。

栈橋を隔てた絶壁には、火食かしょくの煙が靡なみびている、大きな洞穴ほらあなが幾つか見えた。彼はためらわずに栈橋を渡つて、その穴の一つを覗のぞいて見た。穴の中には二人の女が、炬ろの火を前に坐つていた。二人とも火の光を浴びて、描えがいたように赤く見えた。一人は猿のよう

な老婆であつたが、一人はまだ年も若いらしかった。それが彼の姿を見ると、同時に声を挙げながら、洞穴の奥へ逃げこもうとした。が、彼は彼等のほかに男手のないのを見るが早いか、猛然と穴の中へ突き進んだ。そうしてまず造作もなく、老婆をそこへねじ伏せてしまった。

若い女は壁に懸けた刀子とうすへ手をかけるや否や、素早く彼の胸を刺さそうとした。が、彼は片手を揮ふるつて、一打にその刀子を打ち落した。女はさらに劍つるぎを抜いて、執念しゅうねく彼を襲つて来た。しかし劍は一瞬の後、やはり鏘そうぜん然と床ゆかに落ちた。彼はその劍を拾い取ると、切きつ先を齒くわに啣くわえながら苦もなく二つに折つて見せた。そうして冷笑を浮べたまま、戦いを挑いじむように女を見た。

女はすでに斧おのを執とつて、三度彼に手向おうとしていた。が、彼が劍を折つたのを見ると、すぐに斧を投げ捨てて、彼の憐あわれみに訴うべく、床の上にひれ伏してしまった。

「おれは腹はらが減へつてゐるのだ。食事の仕度をしれい。」

彼は捉とらえていた手を緩ゆるめて、猿のような老婆をも自由にした。それから炉の火の前へ行って、楽々とあぐらをかいた。二人の女は彼の命令通り、黙々と食事の仕度を始めた。

## 二十五

洞穴ほらあなの中は広がった。壁にはいろいろな武器が懸けてあった。それが炉の火の光を浴びて、いずれも美々しく輝いていた。床ゆかにはまた鹿しかや熊くまの皮が、何枚もそこに敷いてあった。その上何から起るのか、うす甘い匂においが快く暖な空気に漂っていた。

その内に食事の仕度が出来た。野獣の肉、谷川の魚、森の木この実み、干ほした貝、——そう云う物が盤さらや坏つきうずたかに堆たく盛もられたまま、彼の前に並べられた。若い女は瓶ほたりを執とつて、彼に酒を勧すすむべく、炉のほとりへ坐りに来た。目近まじかに坐まっているのを見れば、色の白い、髪かみの豊かな、愛あい嬌きようのある女であった。

彼は獣けもののように、飲のんだり食たつたりした。盤ばんや坏くわいは見る見る内に、一つ残のこらず空からになつた。女は健けん啖たんな彼を眺のぞめながら子供こどものように微笑わらしていた。彼に刀子とうすを加くえようとした、以前の慄ひようかん悍かんな気色けしきなどは、どこを探しても見えなかつた。

「さあ、これで腹は出来た。今度は着る物を一枚くれい。」

彼は食事をすませると、こう云つて、大きな欠あくび伸のをした。女は洞穴ほらあなの奥おくへ行いつて、絹きぬの着物ぎものを持って来た。それは今まで彼の見た事ことのない、精巧な織オリ模様もようのある着物ぎものであった。

彼は身仕度をすませると、壁の上の武器の中から、頭椎かぶつちの剣つるぎをひとふり振とつて、左の腰に結び下げた。それからまた炉の火の前へ行つて、さつきのようにあぐらかを掻いた。

「何かまだ御用がございますか。」

しばらくの後、女はまた側へ来て、ためらうような尋ね方をした。

「おれは主人の帰るのを待つてゐるのだ。」

「待つて、——どうなさるのでございますか。」

「太刀打たちうちをしようと思うのだ。おれは女おびやかを劫おびやかして、盗人を働いたなどとは云われたくない。」

女は顔にかかる髪を掻き上げながら、鮮あざやかな微笑を浮べて見せた。「それでは御待ちになるがものゝごいませぬ。私がこの洞穴の主人なのでございますから。」

素戔嗚は意外の感に打たれて、思わず眼を大きくした。

「男は一人もいないのか。」

「一人も居りません。」

「この近くの洞穴には？」

「皆私わたくしの妹たちが、二三人ずつ住んで居ります。」

彼は顔をしかめたまま二三度頭を強く振った。火の光、床ゆかの毛皮、それから壁上の太刀たちや劍つるぎ、——すべてが彼には、怪しげな幻のような心もちがした。殊にこの若い女は、きらびやかな頸くびだま珠や劍を飾っているだけに、余計人間離れのした、山やまひめ媛のような気がするのであった。しかし風雨の森林を長い間さまよった後のちこの危害の惧おそれのない、暖な洞穴に坐っているのは、とにかく快いには違いなかつた。

「妹たちは大勢いるのか。」

「十六人居ります。——ただ今姥が知らせに参りましたから、その内に皆御眼にかかりに、出て参るでございましょう。」

成程なるほどそう云われて見れば、あの猿のような老婆の姿は、いつの間にか見えなくなっていた。

## 二十六

素戔嗚すさのおは膝を抱えたまま、洞外をどよもす風雨の音にぼんやり耳を傾けていた。すると女は炬の中へ、新に焚き木を加えながら、

「あの——御名前は何とおっしゃいますか。私は大気都姫おおけつひめと申しますが。」と云った。

「おれは素戔嗚だ。」

彼がこう名乗った時、大気都姫は驚いた眼を挙げて、今更のようにこの無様ぶざまな若者を眺めた。素戔嗚の名は彼女の耳にも、明かに熟しているようであった。

「では今まではあの山の向うの、高天原たかまがはらの国にいらしたのでございますか。」

彼は黙うなずつて頷うなずいた。

「高天原の国は、好よい所だと申すではございませんか。」

この言葉を聞くと共に、一時静まっていた心しんとう頭の怒火どかが、また彼の眼の中に燃えあがった。

「高天原の国か。高天原の国は、鼠いが猪いのししよりも強い所だ。」

大気都姫は微笑した。その拍子ひょうしに美しい齒あざやかが、鮮あざやかに火の光に映って見えた。

「ここは何と云う所だ？」

彼は強いて冷かに、こう話頭を転換した。が、彼女は微笑を含んで、彼の逞たくましい肩のあたりへじつと眼を注いだまま、何ともその間に答えなかった。彼は苛いらだ立たたしい眉まゆを動かし、もう一度同じ事を繰返した。大気都姫は始めて我に返ったように、滴したたるような媚こびを眼

に浮べて、

「ここでございますか。ここは——ここは猪が鼠より強い所でございます。」と答えた。

その時俄にわかに人のけはいがして、あの老婆を先頭に、十五人の若い女たちが、風雨にめげた気色けしきもなく、そろそろ洞穴ほらあなの中へはいって来た。彼等は皆頬くれないに紅をさして、高々と黒髪を束つかねていた。それが順々に大気都姫おおけつひめと、親しそうな挨拶あいさつを交換すると、呆気あつけにとられた彼のまわりへ、馴れ馴れしく手てん手てに席を占めた。頸くびだま珠たまの色、耳環みみわの光、それから着物の絹ずれの音、——洞穴の内はそう云う物が、梶ほたあか明あかりの中に充ち満ちたせい、急に狭せまくなったような心もちがした。

十六人の女たちは、すぐに彼を取りまいて、こう云う山の中にも似合わない、陽気な酒さけ盛かもりを開き始めた。彼は始は唾おしのように、ただ勧めすすめられる盃を一息にぐいぐい飲み干していた。が、酔よがまわつて来ると、追おいおい大きな声を挙げて、笑ったり話したりする様になつた。女たちのある者は、玉を飾かつて琴を弾ひいた。またある者は、盃を控なまめえて、艶なまめかしい恋の歌を唱なつた。洞穴は彼等のえらぐ声に、鳴りどよむばかりであつた。

その内に夜になつた。老婆は炉ろに焚くき木を加くえると共に、幾つも油あぶら火らびの燈台をともした。その昼のような光の中に、彼は泥どろのように酔よい痴しれながら、前後左右に周旋する女た



ちの自由になつていた。十六人の女たちは、時々彼を奪い合つて、互に嬌きよう 嗔しんを帯びた声を立てた。が、大抵は大気都姫が、妹たちの怒には頓着なく、酒に中ひたつた彼を壘ろう断だんしていた。彼は風雨も、山々も、あるいはまた高天原たかまがはらの国も忘れて、洞穴を罩こめた脂粉しふんの気なかの中に、全く沈ちん 洒めんしているようであつた。ただその大騒ぎの最中にも、あの猿のような老婆だけは、静に片隅うすくまに蹲うずくまつて、十六人の女たちの、人目を憚はばからない醉態に皮肉な流し目を送つていた。

## 二十七

夜よは次第しだいに更ふけて行つた。空からになつた盤ざらや瓶びんは、時々けたたましい音を立てて、床ゆかの上うへにころげ落ちた。床の上に敷いた毛皮も、絶えず机したたから滴たる酒に、いつかぐつしより濡ぬらされていた。十六人の女たちは、ほとんど正しやう 体たいもないらしかつた。彼等の口から洩ぬれるものは、ただ意味のない笑い声か、苦しそうな吐息といきの音ばかりであつた。

やがて老婆は立ち上つて、明るい油火の燈台を一つ一つ消して行つた。後には炉ろに消えかかつた、煤すす 臭くさい櫓ぼたの火だけが残つた。そのかすかな火の光は、十六人の女に虐さいまれて

いる、小山のような彼の姿を朦朧もうろうといつまでも照していた。……

翌日彼は眼をさますと、洞穴ほらあなの奥にしつらえた、絹や毛皮の寢床の中に、たった一人横になつていた。寢床には菅すが 畳たたみを延べる代りに、堆うずたく桃かももの花が敷いてあつた。昨日きのうから洞中に溢あふれていた、あのうす甘い、不思議にな匂においは、この桃の花の匂においに違いなかつた。彼は鼻を鳴らしながら、しばらくはただぼんやりと岩の天井を眺めていた。すると氣違あやいじみた昨夜ゆうべの記憶が、夢のごとく眼に浮んで来た。と同時にまた妙な腹立たしさが、むらむらと心頭を襲い出した。

「畜生ちくしょう。」

素戔鳴すさのおはこう呻うめきながら、勢いよく寢床を飛び出した。その拍子に桃の花が、煽あおつたように空へ舞い上つた。

洞穴の中には例の老婆が、余念なく朝飯の仕度をしていた。大氣都姫おおけつひめはどこへ行つたか、全く姿を見せなかつた。彼は手早く靴くつを穿はいて、頭かぶつち椎ちの太刀を腰に帯びると、老婆の挨拶には頓着なく、大股に洞外へ歩を運んだ。

微風は彼の頭から、すぐさま宿しゆくすい 酔いを吹き払つた。彼は両腕を胸に組んで、谷川の向うに戦そよいでいる、さわやかな森林の梢こすえを眺めた。森林の空には高い山々が、中腹に懸つた

靄もやの上に、さんがんたる肌はだを曝さらしていた。しかもその巨大な山々の峰は、すでに朝日の光を受けて、まるで彼を見下しながら、声もなく昨夜ゆうべの狂態あざむらを嘲笑あざわらつていように見えるのであつた。

この山々と森林とを眺めてみると、彼は急に洞穴ほらあなの空氣が、嘔吐おうとを催すほど不快になつた。今は炉ろの火も、瓶びんの酒も、乃至寢床ないしの桃の花も、ことごとく忌いまわしい腐敗においの匂においに充満みみしていると思われなかつた。殊ことにあの十六人の女たちは、いずれも死穢しえを隠かくすために、巧こつな紅粉こうふんを装まつている、屍骨しこつのような心もちさえした。彼はそこで山々の前に、思はず深い息をつくとき、悄しょう然ぜんと頭あたまを低たれながら、洞穴ほらの前に懸かつていゝ藤蔓ふじづるの橋を渡ろうとした。

が、その時賑かな笑い声が、静な谷間に飮くだましながら、活いき活いきと彼の耳にはいつた。彼は我知らず足を止めて、声こゑのする方を振り返かへつた。と、洞穴ほらの前まへに通かよつていゝ、細こい岨そばみ路ちの向むかうから、十五人の妹いもうとをつれた、昨日きのうよりも美しい大氣都姫たいきとひめが、眼早く彼の姿を見つけて、眩まぼゆい絹ぬいの裳もすそを翻ひるがえしながら、こちらへ急いそいで来る所であつた。

「素戔鳴尊。素戔鳴尊。」

彼等は小鳥せうすずの囀せえするように、口々に彼を呼びかけた。その声はほとんど宿命せつかく的に、折角せつかく

橋を渡りかけた素戔鳴の心を蕩漾させた。彼は彼自身の腑甲斐なさに驚きながら、いつか顔中に笑を浮べて、彼等の近づくのを待ちうけていた。

## 二十八

それ以来素戔鳴は、この春のような洞穴の中に、十六人の女たちと放縦な生活を送るようになった。

一月ばかりは、瞬く暇に過ぎた。

彼は毎日酒を飲んだり、谷川の魚を釣ったりして暮らした。谷川の上流には瀑があつて、そのまた瀑のあたりには年中桃の花が開いていた。十六人の女たちは、朝毎にこの瀑壺へ行つて、桃花の勻を浸した水に肌を洗うのが常であつた。彼はまだ朝日のささない内に、女たちと一しよに水を浴ぶべく、遠い上流まで熊笹の中を、分け上る事も稀ではなかつた。その内に偉大な山々も、谷川を隔てた森林も、おいおい彼と交渉のない、死んだ自然に變つて行つた。彼は朝夕静寂な谷間の空気を呼吸しても、寸毫の感動さえ受けなくなつた。のみならずそう云う心の変化が、全然彼には氣にならなかつた。だから彼は安んじ

て、酒びたりな日毎を迎えながら、幻のような幸福を楽んでいた。

しかしある夜夢の中に、彼は山上の岩むらに立つて、再び高天原たかまがはらの国を眺めやった。

高天原の国には日が当つて、天あめの安河やすかわの大きな水が焼太刀やきだちのごとく光っていた。彼は勁

い風に吹かれながら、眼の下の景色を見つめてみると、急に云いようなない寂しさが、胸

一ぱいみなぎに漲つて来た、そうして思わず、声を立てて泣いた。その声にふと眼がさめた時、

涙は實際彼の煩ほおに、冷たい痕を止めていた。彼はそれから身を起して、かすかな楯明ほたあかり

に照らされた、洞穴ほらあなの中を見廻した。彼と同じ桃花とうかの寢床には、酒の勻においのする大気都姫おおけつひめ

が、安らかな寢息を立てていた。これは勿論彼にとつて、珍しい事でも何でもなかつた。

が、その姿に眼をやると、彼女の顔は不思議にも、眉目びもくの形こそ変らないが、垂死すいしの老婆

と同じ事であつた。

彼は恐怖と嫌悪けんおとに、わななく齒を噛みしめながら、そつと生なま暖あたかい寢床を迂すべり脱け

た。そうして素早く身仕度みじたくをすると、あの猿のような老婆も感づかないほど、こつそり洞

穴の外へ忍んで出た。

外には暗い夜の底に、谷川の音ばかりが聞えていた。彼は藤蔓ふじづるの橋を渡るが早いか、

獣けもののように熊笹くまざさを潜くぐつて、木の葉一つ動かない森林を、奥へ奥へと分けて行つた。星の光

冷かな露、苔の勻、梟の眼——すべてが彼には今までにない、爽かな力に溢れているようであった。

彼は後も振返らずに、夜が明けるまで歩み続けた。森林の夜明けは美しかった。暗い樞や樞の空が燃えるように赤く染まった時、彼は何度も声を挙げて、あの洞穴を逃れ出した彼自身の幸福を祝したりした。

やがて太陽が、森の真上へ来た。彼は梢の山鳩を眺めながら、弓矢を忘れて来た事を後悔した。が、空腹を充すべき木の実は、どこにでも沢山あった。

日の暮は瞼しい崖の上に、寂しそうな彼を見出した。森はその崖の下にも、針葉樹の鋒を並べていた。彼は岩かどに腰を下して、谷に沈む日輪を眺めながら、うす暗い洞穴の壁に懸っている、剣や斧を思いやった。すると何故か、山々の向うから、十六人の女の笑い声が、かすかに伝わって来るような心もちがした。それは想像も出来ないくらい、怪しい誘惑に富んだ幻であった。彼は暮れかかる岩と森とを、食い入るように見据えたまま、必死にその誘惑を禦ごうとした。が、あの洞穴の樞火の思い出は、まるで眼に見えない網のように、じりじり彼の心を捉えて行つた。

素戔嗚すさのおは一日いちにちの後、またあの洞中に帰つて来た。十六人の女たちは、皆彼の逃げた事も知らないような顔をしていた。それはどう考えても、無関心を装よそおつていゝとは思われなかつた。むしろ彼等は始めから、ある不思議な無感受性を持つてゐるような気がするのであつた。

この彼等の無感受性は、当座の間彼を苦しませた。が、さらに一月ばかり経つて見ると、反かえつて彼はそのために、前よりも猶安々と、いつまでも醒さめない酔よいのような、怪しい幸福ひたに浸る事が出来た。

一年ばかりの月日は、再び夢のように通り過ぎた。

するとある日女たちは、どこから洞穴ほらあなへつれて来たか、一頭の犬を飼うようになった。犬は全身まつ黒な、犢こやしほどもある牡おすであつた。彼等は、殊おおけつひめに大気都姫は、人間のようになつた。の犬を可愛がつた。彼も始は彼等と一しよに、盤さくらの魚や獣けものの肉を投げてやる事を嫌わなかつた。あるいはまた酒後の戯たわむれに、相撲すもうをとる事も度々あつた。犬は時々前足を飛ばせて、酔よい痴しれた彼を投げ倒した。彼等はその度に手を叩いて、賑かに笑い興いじながら、意気地いくじ





それ以来夜毎の酒盛りにも、十六人の女たちが、一生懸命に奪い合うのは、素戔嗚ではなくて、黒犬であった。彼は酒に中りながら、洞穴の奥に蹲つて、一夜中酔泣きの涙を落していた。彼の心は犬に對する、燃えるような嫉妬で一ぱいであつた。が、その嫉妬の浅間しきなどは、寸毫も念頭には上らなかつた。

ある夜彼がまた洞穴の奥に、泣き顔を両手へ埋めてしていると、突然誰かが忍びよつて、両手に彼を抱きながら艶めかしい言葉を囁いた。彼は意外な眼を挙げて、油火には遠い薄暗がりに、じつと相手の顔を透かして見た。と同時に怒声を発して、いきなり相手を突き放した。相手は一たまりもなく床に倒れて、苦しそうな呻吟の声を洩らした。——それはあの腰も碌に立たない、猿のような老婆の声であつた。

### 三十

老婆を投げ倒した素戔嗚は、涙に濡れた顔をしかめたまま、虎のように身を起した。彼の心はその瞬間、嫉妬と憤怒と屈辱との煮え返っている坩堝であつた。彼は眼前に犬と戯れている、十六人の女たちを見るが早いか、頭椎の太刀を引き抜きながら、この女

たちの群むらつた中へ、我を忘れて突進した。

犬は咄嗟とつぎに身を翻して、危く彼の太刀を避けた。と同時に女たちは、哮たけり立つた彼を引き止むべく、右からも左からもからみついた。が、彼はその腕を振り離して、切先下りにもう一度狂いまわる犬を刺さそうとした。

しかし大刀は犬の代りに、彼の武器を奪おうとした、大気都姫おおけつひめの胸を刺した。彼女は苦痛の声を洩もらして、のけざまに床の上へ倒れた。それを見た女たちは、皆悲鳴を挙げながら、糅じゆう然ぜんと四方へ逃げのいた。燈台の倒れる音、けたたましく犬の吠える声、それから盤さらだの瓶ぼたりだのが粉微塵こなみじんに碎ける音、——今まで笑い声に満ちていた洞穴ほらあなの中も、一しきりはまるで嵐のような、混乱の底に投げこまれてしまった。

彼は彼自身の眼を疑うように、一刹いつせつな那是茫然たたずと佇たんでいた。が、たちまち大刀を捨てて、両手に頭を抑えたとしようと、息苦しそううめな呻うめき声を発して、弦いとを離れた矢よりも早く、洞穴の外へ走り出した。

空には暈かさのかかった月が、無気味ぶきみなくらいぼんやり蒼あおざめていた。森の木々もその空に、暗枝あんしをさし交かわせて、ひっそり谷を封じたまま、何か凶事きようじが起るのを待ち構えているようであった。が、彼は何も見ず、何も聞かずに走り続けた。熊笹は露を振りながら、あたか

も彼を埋めようとすることく、どこまで行つても浪を立てていた。時々夜鳥がその中から、翼に薄い燐光を帯びて、風もない梢へ昇つて行つた。……

明け方彼は彼自身を、大きな湖の岸に見出した。湖は曇つた空の下にちようど鉛の板かと思ふほど、波一つ揚げていなかった。周囲に聳えた山々も重苦しい夏の緑の色が、わずかに人心地のついた彼には、ほとんど永久に癒やす事を知らない、憂鬱そのもののごとくに見えた。彼は岸の熊笹を分けて、乾いた砂の上に下りた。それからそこに腰を下して、寂しい水面へ眼を送つた。湖には遠く一二点、かいつぶりの姿が浮んでいた。

すると彼の心には、急に悲しさがこみ上げて来た。彼は高天原の国にいた時、無数の若者を敵にしていた。それが今では、一匹の犬が、彼の死敵のすべてであつた。——彼は両手に顔を埋めて、長い間大声に泣いていた。

その間に空模様が変わつた。対岸を塞いだ山の空には、二三度鍵の手の稲妻が飛んだ。続いて殷々と雷が鳴つた。彼はそれでも泣きながら、じつと砂の上に坐つていた。やがて雨を孕んだ風が、大うねりに岸の熊笹を渡つた。と、俄に湖が暗くなつて、ざわざわ波が騒ぎ始めた。

雷が猶鳴り続けた。その内に対岸の山が煙り出すと、どこともなくざつと木々が鳴つて、

一旦暗くなつた湖が、見る見る向うからまた白くなつた。彼は始めて顔を挙げた。その途端に天を傾けて、瀑のような大雨が、沛然と彼を襲つて来た。

## 三十一

対岸の山はすで見えなくなつた。湖も立ち罩めた雲煙の中に、ややともすると紛れそうであつた。ただ、稲妻の閃く度に、波の逆立つた水面が、一瞬間遠くまで見渡された。と思うと雷の音が、必ず空を掻きむしるように、続けさまに轟々と爆発した。

素戔鳴はずぶ濡れになりながら、未だなげき、そこに汀の砂を去らなかつた。彼の心は頭上の空より、さらに晦濛の底へ沈んでいた。そこには穢れ果てた自己に対する、憤懣よりほかに何もなかつた。しかし今はその憤懣を恣に洩らす力さえ、——大樹の幹に頭を打ちつけるか、湖の底に身を投ずるか、一気に自己を亡すべき、最後の力さえ涸れ尽きていた。だから彼は心身とも、まるで破れた船のように、空しく騒ぎ立つ波に臨んだまま、まっ白に落す豪雨を浴びて、黙然と坐っているよりほかはなかつた。

天はいよいよ暗くなつた。風雨も一層力を加えた。そうして——突然彼の眼の前が、ぎ

らぎらと凄まじい薄紫うすむらさきになった。山が、雲が、湖が皆半空はんくうに浮んで見えた。同時に地軸ちじくも砕けたような、落雷らくらいの音が耳を裂さいた。彼は思わず飛び立とうとした。が、すぐにまた前へ倒れた。雨は俯伏うつぶせになった彼の上へ未練未釈みれんみしゃくなく降り濺そそいだ。しかし彼は砂の中に半ば顔を埋うずめたまま、身動きをする気色けしきも見えなかった。……

何時間か過ぎた後のち、失神した彼はおもむろに、砂の上から起き上った。彼の前には静な湖が、油のように開いていた。空にはまだ雲が立ち迷つてただ一幅の日の光が、ちょうど対岸の山の頂へ帯のように長く落ちていた。そうしてその光のさした所が、そこだけほかより鮮あざやかな黄ばんだ緑ほのに仄ほのめいていた。

彼は茫然と眼を挙げて、この平和な自然を眺めた。空も、木々も、雨後の空気も、すべてが彼には、昔見た夢の中の景色のような、懐しい寂莫せきぼくに溢あふれていた。

「何かおれの忘れていた物が、あの山々の間に潜ひそんでいる。——彼はそう思いながら、貪むさぼるように湖を眺め続けた。しかしそれが何だったかは、遠い記憶を辿たどって見ても、容易に彼には思い出せなかった。

その内に雲の影が移つて、彼を囲む真夏の山々へ、一時に日の光が照り渡つた。山々を埋うずめる森の緑は、それと共に美しく湖の空に燃え上つた。この時彼の心には異様な戦慄せんりつ

が伝わるのを感じた。彼は息を呑みながら、熱心に耳を傾けた。すると重なり合つた山々の奥から、今まで忘れていた自然の言葉が声のない雷いかずちのように轟とどろいて来た。

彼は喜びに戦おのいた。戦おのきながらその言葉の威力の前に圧倒された。彼はしまいには砂に伏して、必死に耳を塞ふさごうとした。が、自然は語り続けた。彼は嫌でもその言葉に、じつと聞き入るより途みちはなかつた。

湖は日に輝きながら、澆はつらつ測とその言葉に応じた。彼は——その汀なぎさにひれ伏している、小さな一人の人間は、代る代る泣いたり笑つたりしていた。が、山々の中から湧き上る声は、彼の悲喜には頓着なく、あたかも目に見えない波濤のように、絶えまなく彼の上みなぎへ漲つて来た。

## 三十二

素戔鳴すさのおはその湖の水を浴びて、全身の穢けがれを洗い落した。それから岸に臨んでいる、大きな樅もみの木もみの陰へ行つて、久しぶりに健すこな眠ねに沈んだ。が、夢はその間も、深い真夏の空の奥から、鳥の羽根が一すじ落ちるように、静に彼の上へ舞まい下さがつて来た。——

夢の中は薄暗かった。そうして大きな枯木が一本、彼の前に枝を伸のばしていた。

そこへ一人の大男が、どこからともなく歩いて来た。顔ははっきり見えなかったが、柄つかに竜の飾のある高麗剣こまつるぎを佩はいている事は、その竜の首が朦朧もうろうと金色こんじきに光っているせいか、一目にもすぐに見分けられた。

大男は腰の剣つるぎを抜くと、無造作むぞうさにそれを鏢つばもと元まで、大木の根本へ突き通した。

素戔鳴はその非凡な臂りよりよく力に、驚嘆しずにはいられなかった。すると誰か彼の耳に、

「あれは火雷命ほのいかずちのみことだ。」と、囁ささやいてくれるものがあつた。大男は静に手を挙げて、

彼に何か相図あいずをした。それが彼には何となく、その高麗剣こまつるぎを抜けと云う相図あいずのように感じられた。そうして急に夢が覚めた。

彼は茫然と身を起した。微風に動いている樅もみこすえの梢こずえには、すでに星が撒まかれていた。周囲にも薄白い湖のほかは、熊笹こまの戦そよぎや苔こけの匂においが、かすかに動いている夕闇があつた。彼は今見た夢を思い出しながら、そう云うあたりへ何気なく、懶ものうい視線しせんを漂ただよわせた。

と、十歩と離れていない所に、夢の中のそれと変りのない、一本の枯木のあるのが見えた。彼は考える暇いとまもなく、その枯木の側へ足を運んだ。

枯木はさつきの落雷に、裂さかれたものに違いなかつた。だから根元には何かの針葉しんようが、

枝ごと一面に散らばっていた。彼はその針葉を踏むと同時に、夢が夢でなかつた事を知つた。——枯木の根本には一振の高麗劍が竜の飾のある柄を上にとんと鏢も見えないほど、深く突き立っていたのであつた。

彼は両手に柄を掴んで、渾身の力をこめながら、一気にその劍を引き抜いた。劍は今し方磨いだように鏢元から切先まで冷やかな光を放っていた。「神々はおれを守つて居て下さる。」——そう思うと彼の心には、新しい勇氣が湧くような気がした。彼は枯木の下に跪いて天上の神々に祈りを捧げた。

その後彼はまた樞の木陰へ歸つて、しっかりと劍を抱きながら、もう一度深い眠に落ちた。そうして三日三晩の間、死んだように眠り続けた。

眠から覚めた素戔嗚は再び体を清むべく、湖の汀へ下りて行つた。風の風ぎ尽した湖は、小波さえ砂を揺すらなかつた。その水が彼の足もとへ、汀に立った彼の顔を、鏡のごとく鮮かに映して見せた。それは高天原の国にいた時の通り、心も体も逞しい、醜い神のような顔であつた。が、彼の眼の下には、今までにない一筋の皺が、いつの間にか一年間の悲しみの痕を刻んでいた。



## 三十三

それ以来彼はたった一人、ある時は海を渡り、ある時はまた山を越えて、いろいろな国をさまよつて歩いた。しかしどの国のどの部落も、未嘗て彼の足を止めさせるには足らなかつた。それらは皆名こそ変つていたが、そこに住んでいる民の心は、高天原の国と同じ事であつた。彼は——高天原の国に未練のなかつた彼は、それらの民に一臂の勞を借してやつた事はあつても、それらの民の一人となつて、老いようと思つた事は一度もなかつた。「素戔嗚よ。お前は何を探しているのだ。おれと一しよに来い。おれと一しよに来い。……」

彼は風が囁くままに、あの湖を後にしてから、ちようど満七年の間、はてしない漂泊ひょうはくを続けて来た。そうしてその七年目の夏、彼は出雲の簸ひの川さかのぼを遡さかつて行く、一艘いっそうの独木舟まるきぶねの帆の下に、蘆あしの深い兩岸を眺めている、退屈な彼自身を見出したのであつた。蘆あしの向うには一面に、高い松の木が茂つていた。この松の枝が、むらむらと、互せめに鬩あぎ合つた上には、夏なつがすみ霞なつがすみに煙けむりつている、陰鬱な山々の頂いただきがあつた。そうしてそのまた山々の空には、時々鷺さぎが両三羽、眩まぼゆく翼ひらめを閃かせながら、斜ななめに渡つて行く影が見えた。が、こ

の鷲の影を除いては、川筋一帯どこを見ても、ほとんど人を脅すような、明い寂寞が支配していた。

彼は舷ふなばたに身を凭もたせて、日に蒸むされた松脂まつやにの匂においを胸一ぱいに吸いこみながら、長い間独ま木舟るぎふねを風の吹きやるのに任せていた。實際この寂しい川筋の景色も、幾多の冒険に慣なれた素戔鳴には、まるで高天原たかまがはらの八衢やちまたのように、今では寸分すんぶんの刺戟しげきさえない、平凡な往来に過ぎないのであった。

夕暮が近くなつた時、川幅が狭くなると共に、兩岸には蘆あしが稀まれになつて、節ふしくれ立つた松の根ばかりが、水と泥との交まじる所を、荒涼と絡かかつているようになつた。彼は今夜の泊りを考えながら、前よりはやや注意深く、兩岸に眼を配くばつて行つた。松は水の上まで枝垂しだれた枝を、鉄網のように纏からめ合せて、林の奥の神秘的な世界を、執念しゆうねく人目ひとめから隠していた。それでも時たまその松が、鹿しかでも水を飲みに来るせいか、疎まばらに透すいている所には不気味なほど赤い大茸おおたけが、薄暗い中に簇そうそう々むらと群むらつてゐる朽木も見えた。

益々夕暮が迫つて来た。その時、彼は遙か向うの、水に臨んでゐる一枚岩の上に、人間らしい姿が一つ、坐つてゐるのを発見した。勿論この川筋には、さつきから全然人煙じんえんの挙あがつてゐる容子ようすは見えなかつた。だからこの姿を発見した時も、彼は始は眼を疑つて、高こ

麗劍まつるぎの柄つかにこそ手をかけて見たが、まだ体は悠々と独木舟の舷に凭せていた。

その内に舟は水脈みおを引いて、次第にそこへ近づいて来た。すると一枚岩の上にいるのも、いよいよ人間に紛れまぎなくなつた。のみならずほどなくその姿は、白衣びやくいの据を長く引いた、女だと云う事まで明らかになつた。彼は好奇心に眼を輝かせながら、思わず独木舟の舳みよしに立ち上つた。舟はその間も帆ほに微風を孕はらんで、小暗く空に蔓はびこつた松の下を、刻々一枚岩の方へ近づきつつあつた。

### 三十四

舟はとうとう一枚岩の前へ来た。岩の上には松の枝が、やはり長々と枝垂しだれていた。素す戔さ鳴のは素早く帆を下すと、その松の枝を片手に掴つかんで、両足へうんと力を入れた。と同時に舟は大きく揺れながら、舳いに岩角いわかどの苔こけをかすつて、たちまちそこへ横づけになつた。

女は彼の近づくのも知らず、岩の上へ独り泣き伏していた。が、人のけはいに驚いたのか、この時ふと顔を擡もたげて、舟の中の彼を見たと思うと、やにわに悲鳴を挙げながら、半ば岩を抱いだている、太い松の蔭に隠れようとした。しかし彼はその途端とたんに、片手に岩角を

掴んだまま、「御待ちなさい。」と云うより早く、後へ引き残した女の裳を、片手にしつかり握りとめた。女は思わずそこへ倒れて、もう一度短い悲鳴を漏らした。が、それぎり身を起す気色もなく、また前のように泣き入ってしまった。

彼は纜を松の枝に結ぶと、身軽く岩の上へ飛び上った。そうして女の肩へ手をかけながら、

「御安心なさい。私は何もあなたの体に、害を加えようと云うのじやありません。ただ、あなたがこんな所に、泣いているのが不審でしたから、どうしたのかと思つて、舟を止めたのです。」と云つた。

女はやつと顔を挙げて、水の上を罩めた暮色の中に、怯ず怯ず彼の姿を見上げた。彼はその刹那にこの女が、夢の中にのみ見る事が出来る、例えばこの夏の夕明りのような、どことなくもの悲しい美しさに溢れている事を知つたのであつた。

「どうしたのです。あなたは路でも迷つたのですか。それとも悪者にでも浚われたのですか。」

女は黙つて、首を振つた。その拍子に頸珠の琅玕が、かすかに触れ合う音を立てた。彼はこの子供のよな、否と云う返事の身ぶりをみると、我知らず微笑が唇に上つて

来ずにはいられなかつた。が、女はその次の瞬間には、見る見る恥しそうな色に頬を染めて、また涙に沾うるんだ眼を、もう一度膝ひざへ落してしまつた。

「では、——ではどうしたのです。何か難儀な事でもあつたら、遠慮なく話して御覽なさい。私に出来る事でさえあれば、どんな事でもして上げます。」

彼がこう優しく慰めると、女は始めて勇氣を得たように、時々まだ口ごもりながら、とにかく一切の事情を話して聞かせた。それによると女の父は、この川かわ上かみの部落の長おさをしている、足名権あしなつちと云うものであつた。ところが近頃部落の男女なんによが、続々と疫えき病びょうに仆たおれるため、足名権は早速巫女みこに命じて、神々の心を尋ねさせた。すると意外にも、ここにいる、櫛名田姫くしなだひめと云う一人娘を、高志こしの大蛇おろちの犠いけにえにしなければ、部落全体が一月ひとつきの内に、死に絶えるであろうと云う託宣たくせんがあつた。そこで足名権は己やむを得ず、部落の若者たちと共に舟を舩ぎして、遠い部落からこの岩の上まで、櫛名田姫を運んで来た後あと、彼女一人を後に残して、帰つて行つたと云う事であつた。

### 三十五

櫛名田姫くしなだひめの話はなしを聞き終ると、素戔鳴すさのは項うなじを反らせながら、愉快うきそうに黄昏たそがれの川を見廻みまわした。

「その高志こしの大蛇おうちと云うのは、一体どんな怪物けぶつなのです。」一人の噂うわさを聞きますと、頭かしらと尾おしとが八つある、八つの谷やにも亘わたるくらい、大きな蛇くちなわだとか申す事ことでございませう。」

「そうですか。それは好よい事を聞きました。そんな怪物けぶつには何年なんねんにも、出合であった事ことがありませんから、話を聞きいたばかりでも、力ちから瘤こぶの動うごくような気がきがします。」

櫛名田姫くしなだひめは心配しんぱいそうに、そつと涼すずしい眼まなこを挙あげて、無頓着むとんちゃくな彼かれを見守みまった。

「こう申す内うちにもいつ何なん時とき、大蛇おうちが参まるかわかりませんが、あなたは——」

「大蛇おうちを退治たいじする心算しんざんです。」

彼はきつぱりこう答こたえると、両腕りょううでを胸むねに組くんだまま、静しずに一枚岩まいわの上うへを歩あき出した。

「退治たいじすると仰おつし有あっても、大蛇おうちは只今ただいま申まし上げた通り、一方ひとかたならぬ神かみでございませうから——」

「そうです。」

「万ばん一いちあなたがそのために、御怪我おんけがをなさらないとも限りませぬし、——」

「そうです。」

「どうせ私は犠になるものと、覚悟をきめた体でございます。たといこのまま、——」  
 「御待ちなさい。」

彼は歩みを続けながら、何か眼に見えない物を払いのけるような手真似をした。

「私はあなたをおめおめと大蛇の犠にはしたくないのです。」

「それでも大蛇が強ければ——」

「仕方がないと云うのですか。たとい仕方がないにしても、私はやはり戦うのです。」

櫛名田姫はまた顔を赤めて、帯に下げた鏡をまさぐりながら、かすかに彼の言葉を押し

返した。

「私が大蛇の犠になるのは、神々の思召しでございます。」

「そうかも知れません。しかし犠になると云う事がなかったら、あなたは今時分たった一人、こんな所に来てはいないでしょう。して見ると神々の思召しは、あなたを大蛇の犠にするより、反つて私に大蛇の命を断たせようと云うのかも知れません。」

彼は櫛名田姫の前に足を止めた。と同時に一瞬間、厳な權威の閃きが彼の醜い眉目の間に磅したように思われた。

「けれども巫女が申しますには——」

櫛名田姫の声はほとんど聞えなかった。

「巫女は神々の言葉を伝えるものです。神々の謎を解くものではありません。」

この時突然二頭の鹿が、もう暗くなった向うの松の下から、わずかに薄<sup>うすじら</sup>白んだ川の中へ、水<sup>みず</sup>煙<sup>けむり</sup>を立てて跳<sup>わた</sup>りこんだ。そうして角<sup>つの</sup>を並べたまま、必死にこちらへ泳ぎ出した。

「あの鹿の慌<sup>あわ</sup>てようは——もしや来るのではございますまいか。あれが、——あの恐ろしい神が、——」

櫛名田姫はまるで狂気のように、素戔鳴の腰へ縋<sup>すが</sup>りついた。

「そうです。とうとう来たようです。神々の謎の解ける時<sup>とき</sup>が。」

彼は対岸に眼を配<sup>くば</sup>りながら、おもむろに高麗劍<sup>こまつるぎ</sup>の柄<sup>つか</sup>へ手をかけた。するとその言葉がまだ終らない内に、驟<sup>しゅう</sup>雨<sup>う</sup>の襲<sup>せう</sup>いかかるような音が、対岸の松林を震わせながら、その上に疎<sup>まばら</sup>な星を撒<sup>ま</sup>いた、山々の空へ上<sup>のぼ</sup>り出した。

(大正九年五月)







# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集<sup>3</sup>」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「大阪毎日新聞 夕刊」

1920（大正9）年3月～6月

入力：j.utyama

校正：湯地光弘

1999年8月27日公開

2012年3月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 素戔嗚尊

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>